



“聖書読み” のコツ

河村従彦
Yorihiko Kawamura



いのちのことば社

“聖書読み”
のコツ

河村従彦
Yorihiko Kawamura

いのちのことば社

1-2
67

220,601
K224



装丁デザインオフィス ニューズ

河村 從彦 寄贈

22752

はじめに——なぜ今、聖書読解法なの？

昨今、文字離れということが言われます。聖書離れもあるかもしれません。ネット時代、あらゆる情報が便利に手に入ることに慣れてしまっているせいかな、「毎日聖書を読むのはかったるい」。そのとおりだと思います。

興味が湧かなかった聖書

私は牧師をしています。くだらない人間が今も奉仕しているのですから、申し訳ない限りです。それでも牧師ですから、みことばを分かち合うのが仕事です。今はそれが仕事になっていますが、長いことクリスチャンをしながら、最初から聖書がおもしろかったわけではありません。砂をかむようで、読みなさいと言われるから、逆に「それなら読むもんか」という程度の意識でした。実際、ほとんど読んでいませんでした。さらには、通読などと言われると、もううんざりです。

神学校に行けば、聖書の勉強をするから多少はましになるかと思いましたが、神学校に行っても、神学校を卒業しても、「正直言つて興味は湧きませんでした。もちろんぜんぜんつまらなかつたわけはありません。おもしろい箇所もありました。みことばを学ぶおもしろさも経験しました。しかしそれでも、私にとつて聖書は、目の前にある「もの」で、生きることを変えるだけのインパクトはありませんでした。

行き詰まり

ところが、牧師になって何年かして、あることを通して、「聖書って、もしかして、生きるために大切なことが書いてあるかもしれない」と思うようになりました。それまでは「やらせ」で、「聖書は意味がある」ことにしていました。盛らずに正直に申し上げれば、今も、「聖書って、もしかしておもしろいかもしれないなあ」と思っている程度です。のめり込むようにしてガンガン読むことはしていません。

「あること」とはサクッと言えば挫折体験のようなものです。そのとき、自分が心底罪あるものであることがわかりました。自分が牧師として資格があるというのはそもそも思い込みだったということもあります。主の奉仕に携わる資格は、自分にはその時点でまったくなくなつたと感じました。立派な、そこそこ用いられる牧師になろうなどという色気にも嫌気がさしました。それ以来、「用いられる」ということが嫌なことばだなど思うようになりました。見た目だけの「ええかつこしい」、

ことばだけ躍る説教、それでありながら自分にとってまったく味気ない本、その聖書を語らなければならぬ自己矛盾、自由のない牧師生活、そのような見た目だけの「牧師もどき」が牧師を辞めようと思いました。それで、決断したのですが、結局奉仕の世界にとどまることになりました。ですから、その時から後の人生は全部がただ恵みです。資格がないという資格で奉仕しているだけです。

まったく違つていた聖書

人生は変なものです。牧師を辞めようとしたら、牧師が仕事の材料にしている聖書の風景が突然変わりました。そのときに、「もしかしたら、まったく違う世界が広がっているかもしれない」と思いました。

そう思つて聖書を読み返してみると、聖書の中に書かれていることが、幼少期から教えられてきたこと、神学校で教えていただいたこと、神学的に言えばそうに違いないと自分なりに整理していたこととまったく違つていて、恵みの世界が広がっていることに気づきました。何年もクリスチャンをしていながら、聖書がぜんぜん読めていなかったこともわかりました。

そのとき、二つのことを心に決めました。一つは、聖書は自分で読んで内容を確認しようということ。偉い先生が言つたからということ、検証もせずうのみに行っていることだけでした。うのみにすれば一番楽です。考えなくてすみます。それらしく振る舞うこともできます。「わかっているクリスチャンもどき」です。しかし、そのとき以来、申し訳ないけれども、自分の目で確認するまで信

じない、と決めました。

それからもう一つは、素で生きていこうということでした。「ええカッコしい」はやめよう、自分は何を守っていたのだろう、と思いました。グループの神学と主張を守ってきたのか、現家族の価値観を守ってきたのか、キリスト教を守ってきたのか、そう思うと、神学的にはどこかに依存している、まったく自立できていない自分であることがわかりました。素で生きると決めたら、ずいぶん楽になりました。

受け手本意への視点の転換

そのころ、アメリカの神学校で学んだことがもしかしたら役に立っているのではないかということに気づくようになりました。新しく教えていただいたのは、福音を伝えるときには「受け手本意」でなければいけないという考え方でした。どのようなメカニズムでものが伝わるのかということも教えていただきました。それまでは、真理を与えられているのだから、それを真理として語ればよいのだという、まことに独りよがりな発想でしかありませんでした。真理を与えられているのは自分たちだけという考え方は紙一重で、そうでない人たち、たとえばクリスチャンでない人たちを見下すことになります。神学生時代を経て牧師になって数年、そのことにすら気づいていませんでした。

受け手から見る考え方は、宣教の働きを担ってくださった欧米の宣教師たちが、伝えるという奉仕は本当にこれで良かったのかということを真摯に反省されたことから出ています。実際私たち日本人

も、そのような方々のご奉仕があったからこそ今の教会があり、それだけでも大変お世話になっているのですが、それでありながら彼らは、もっと受け手を理解すべきだったのではないかと考えました。そのような考え方を土台にした宣教についての学びが発展し、今は神学の枠組みから独立して一つの学びの領域を形成するくらいになっています。

「受け手本意」でものを見るという考え方は、従来の西洋の発想で組み立てられた神学がはたしてそれで良かったのかという問いかけになりました。つまり、それまでの神学は、その担い手が欧米の方々中心であり、もちろんそれが間違いだということではないのですが、神学を組み立てた欧米の発想とは違う文化の人たちにも適用できるか、という問題意識でした。そのような問題意識が出るということは、実際のところ、いろいろギクシャクがあったということです。たとえば、私たちがいえば、神学の用語が日本人の感性と心に本当に響くものなのか、あるいは、お墓の問題、祖先崇拜の問題は、私たちが聞いてきた神学用語で答えが出るのか、といったことです。もし聖書はファイナル・アンサーだと宣言するのならば、欧米以外のどの文化にも適用可能なはずです。真理はものすごく柔軟性があり、文化や形に拘束されないものだからです。もし福音がこの文化圏では通用しないということが証明されたら、その時点で、真理の旗印を降ろさなければいけなくなるのです。

そのようなことをいろいろ考えているうちに、とても大切なことに気づきました。それは、伝える側が受け手の側に立つてものを見るという「受け手本意」の考え方は、人間の文化の中に入ってこられたイエスさまの姿勢と見事に重なるということでした。神さまは、受け手である私たち人間の側に

立ってくださっただけでなく、受け手の側である人間そのものにもなされた方でした。まさに「目からウロコ」の体験でした。

みことばの奉仕大反省

もう一つ教えていただいたのが聖書の読み方でした。簡単に言うと、最初から結論ありきで聖書を読み込むのではなく、一度自分の眼鏡をわきに置いて、文脈を大切にしながら聖書のみことばからデーターを集め、そこから平らな心で教えられていこうという読み方です。これも「目からウロコ」でした。

それまでの自分を振り返ると、文脈は無視し、「深掘り」などといってその節をいじくり回し、たまには原語の意味まで調べてわかったつもりになっていました。つまり、私の思いは、聖書の記者がそもそも何を言いたかったのかに向けられていたのではなく、自分が教わった神学のみことばの後づけで説明していただけでした。しかも、自分がみことばと向き合ったのではないわけですから、自分が信じている神学が本当に聖書的なかという検証もできません。講壇から語る説教は、人から教えられただけの解釈で、聞いてくださる人に押しつける独りよがりの説教になりました。「受け手本意」の発想など微塵もありませんでした。語っていた内容はまさに「正論」でした。やればやるほど正論に磨きがかかりました。しかし、自分が情けない人間だということを知らないで、人を何とかしようと思つて説教しているのですから、聞いてくださる方をずいぶん傷つけていたと思います。本当

に申し訳なかったと、今になってはお詫びする以外にありません。

話を戻します。これらの視点を活用して自分の聖書を一度リセットし、当たり前のように解釈が決まってしまうみことばの意味を問い直しました。そうすると、誤解している聖書のことばがたくさんあることに気づきました。

比較的若いころから、神学校でクラスを担当するご奉仕が与えられてきました。聖書の学びのクラスで、神学生の方々といっしょに、みことばの意味を「わかったことにせず」に問い直すのはとても充実した作業です。文脈に注意を払いながらみことばの意味を問い直すことで与えられる「気づき」は、少しワクワクします。そして、人に言いたくなくなります。つたない奉仕ですが、その小さな恵みをおこぼにしたものが礼拝説教になりました。

このような言い方をすると大それた感じですが、実際はそんなたいしたことではありません。本書の内容は、自分に行き詰まったときに、教えていただいた考え方を駆使してみことばに向き合った小さな取り組みにすぎません。しかし、その「プチ発見」によって心の凝りがほぐされる、その小さな体験をお分かちできればと思います。

聖書読解法そのものについては割愛し、信徒の方にも読んでいただける読み物にしました。聖書読解法を学びたい方がおられましたら、「巻末資料」の基本フォーマットと「参考文献」をご覧ください。なお本書は、エパタシリーズ2「開け！みことばへの耳——もつと教師が生かされるために」（イムマヌエル綜合伝道団・教会学校部）のために依頼を受けて書いた原稿をもとに、大幅な加筆・修

正をしたものです。

それでは、みことばを文脈で読む「プチ発見」の旅路をスタートします。

目次

はじめに——なぜ今、聖書読解法なの？ 3

第1章 聖書を読むって 15

聖書という本の組み立て 15 / ザクッと読み 17 / 文脈読み 18
聖書を読む三つのステップ 20

第2章 そもそも聖書って何？ 27

神さまのことばである本 27 / 人間が記録した本 32
コミュニケーションの考え方 34 / 神さまのコミュニケーション 40

第3章 聖書は日本語で読む 51

原語で読まなくてもよい本 51 / 聖書学の知見から学ぶ姿勢 53

第4章 聖書読みのコツ 62

恵みの原則—逆説で書かれている 63 / 神イメージの原則—裁判官から父・牧者へ 68
立ち位置の原則—自分をどこに重ねるか 71 / 人間観察の感性—人間っておもしろい 75
ユーモアの感性—ほほ笑んで聖書を感じる 79
非連続性の原則—人間の行き詰まりの向こう側に 80

第5章 このみことばってどんな意味なの？ 84

みことばの意味の決まり方 86 / 第一義的解釈と拡大解釈 88
みことばの意味再考 90

第6章 書全体の構成からメッセージが見えてくる 98

創世記—ユダを記したかった？ 99 / 列王記—王さまを並べたいのではない？ 104
ルカ文書—使徒の働きは一章八節では読めない？ 105

第7章 山上の説教を文脈で読んでみる 109

できないことが書いてある？ 110 / アウトライン 111 / 説教を聞いていた人たち 115
律法学者やパリサイ人の義 120 / 見える世界と見えない世界 122
天国貯金はできません 127 / 第一にすべき神の国とは 128
さばいてはいけない、マジで？ 130 / 自分の目から梁を取り除く落とし穴 136
さばくことが偽善？ 141 / 狭い門は狭くない？ 142 / 大切なのは見えない土台 145

おわりに—恵みに生かされる世界へ 151

〈巻末資料〉—帰納的聖書読解法の基本フォーマット 155

第1章 聖書を読むって

まず、聖書を読むとはどういうことを考えます。クリスチャンの習慣として、聖書は通読しなさいと勧められます。たしかに信仰の成長のために大切なことです。ところが、一生懸命取り組み始め、最初は新鮮でも、しばらくすると何だか味気ないものになってしまうことがあります。この章では、聖書の読み方について少し考えてみます。

聖書という本の組み立て

聖書は読者フレンドリー、つまり「読者にやさしく」書かれているとはいえません。ソファーに寝そべりながらではとても読めませんし、まずあの厚さからして戦闘意欲がそがれてしまいます。何を

言いたいのだろうと頭をひねって読まない、見えてこない部分もありますし、読もうとすると、実際かなり気合が入ります。読む人の姿勢にツッコミを入れてくるようなところがあります。

さらに、聖書は毎日読むと、「かつたるく」なる本です。実はそういう本なのです。聖書はもともと、毎日読むように書かれていません。聖書は毎日読んでもらうことが苦手です。

「かつたるい」という感想をおもちになったことのある方は、いわゆる通読をしておられるかもしれませんが。聖書通読表もあります。聖書日課もあります。いずれも信仰の成長のために役に立つと思います。しかし、章や節をふったのは後代の人たちです。つまり、書いた人は、通読してもらおうなどと思っていなかったということです。はっきり申し上げましょう。通読という読み方だけでは、聖書が伝えたいと思っていることのかかなりの部分はわかりません。

旧約聖書は、全部が全部そうではないと思いますが、そもそも読むために書かれたものではなく、礼拝のときに聞くためのもの、あるいは声を合わせて歌うためのものだったようです。新約聖書は、前半はキリストの生涯の伝記です。四人が書きましたが、かなり視点が違い、書いた意図もそれぞれバラバラです。それぞれが伝えたかったイエス像があるはずですが。後半は手紙です。差出人がいて、宛先があつて手紙を書いている以上、手紙全体で何か伝えたいこと、やってほしいことがあるはずですが。

これが聖書です。そうすると、一日分を小間切れにして読むという読み方が聖書になじまないことはすぐにわかります。聖書は、一日分を区切って読むように書かれていないのです。

誤解しないでください。通読は意味がないと申し上げているわけではありません。今までどおり、少しずつみことばに親しむことを大切にしてください。

ザクツと読み

それではどのように読めばよいのかということですが、一つはザクツと読みです。一つの書をザツと読んで、書いた人は結局何を言いたかったのかを考えると、読む方が楽です。一つの書をザツと読んで、書いた人は結局何を言いたかったのかを考えると、読む方が楽です。

田舎のおふくろから手紙が来たときのことを想像してください。封筒を開くと、かなり長文です。最初に何を考えますか。「ああ、おふくろが手紙をよこしたということは、何か言いたいことがあるんだろうな。これだけ長いと、説得したいこともあるのかな。面倒だな。」そして読み始めます。一ページめ、二ページめ、三ページめ、そろそろ嫌になってきます。そしてやっと最後のページ。「ああ、読み終わった。」さて、読み終わってあなたは何を考えますか。

「結局、おふくろは何を言いたかったのかな。」なんだかよくわからずに、読み終わった手紙を前にして考えてしまうこともあるでしょう。改めてこのように考え直さなくても、「ああ、そういうことね」と、読み終わった瞬間、すっきりとわかることもあります。

手紙の最初のページを読むときに、一行目にあることばの釈義などは行いません。「寒くなつてき

ましたが、「元気でやっていますか。」「うーん、『元気』ってどういう意味だろう。」こんな読み方を
する人はいません。

ところが、聖書を読むときにはこのような読み方をしています。しかも通読するとは、「きょうは
一日目だから、手紙の一ページを読もう。」そして、一ページを読んで、そこでストップします。
翌日、二ページめを読みます。でも、おかしな読み方ですね。聖書は、その書を最後まで読み終えて、
その時点で何を言いたいのかを考えることが大切です。

文脈読み

ところが、ザクッと読みだけですと、みことばの一つひとつを味わうことができません。ここで、
もう一つの読み方があります。文脈読みです。一つのみことばの意味を決めるためには前後の文脈を
見る必要があるという考え方です。

実はこれは日常生活でもやっています。たとえば、ある入院患者の方が、午後、病院の中庭で、あ
なたが押す車いすに乗っているときにこう言ったとしましょう。

「先生、今、何時ですか。」

このひと言はどのような意味があるでしょうか。意味を突きとめる、いわゆる「解釈」です。

まずあなたは、どこに思いを向けますか。

「そくだ、『先生』という日本語の意味と用法を考えてみよう。」それで辞書をいろいろ調べます。
次に「今」ということばの意味を調べます。「今」って、どういうときに使うことばなのだろう。」

このように、ことばの意味を調べることで、「先生、今、何時ですか」という文章の意味を決めよ
うとします。聖書を解釈するときに行っていることは、これに近いことです。

しかし実は、「先生」ということばの意味を調べても、「今」ということばの意味を調べても、この
文章の意味はわかりません。

「先生、今、何時ですか」という文章には、いろいろな意味が込められている可能性があります。
たとえば、「先生、もう寒いので、部屋に帰りたいのですが」という意味かもしれません。「先生、あ
なたといっしょにいるのは息が詰まりそうです。私を解放してください」という意味かもしれません。
また、「先生、散歩の時間は四時までと決まっていますが、あなたといっしょにいるとホッとするの
で、もう少しいっしょにいたいです」という意味かもしれません。このように、同じ一つの文章で
も、まったく違うことを伝えようとしている可能性があるのです。

それでは、意味はどうしたらわかるのでしょうか。それは、前後の文脈を見ることです。このひと
言が言われる前にどういう会話のやり取りがあったのか、このひと言の後にどういうことばが交わさ
れたのか。そもそも、だれがだれに言ったことばなのか、言った人と言われた人はどういう関係にあ
ったのか、それを観察すると、この短い文章の意味はわかります。

私たちが聖書のみことばの意味を解釈する方法は、「先生」ということばの意味を調べ、「今」ということばの意味を調べ、それのみことばの意味を決めるという方法です。しかしこの方法では、ある程度のことばはわかっていても、本当のところは読めていないということが起きます。

聖書のみことばは、前後の文脈を見ることによって、その意味がわかることがしばしばあります。むしろ、聖書は言語コミュニケーションなので、前後の文脈を最初から意識したほうが、記者が伝えようとしたこと、そして神さまが私たちに伝えたいと願っておられることがよくわかるのではないかと。この書では、このようなことをごいっしょに考えていきたいと思います。

聖書を読む二つのステップ

聖書を読むことはクリスチャンにとっても大切なことです。神さまが私たちの救いに必要十分なメッセージを伝えてくださったメディアです。神さまが聖書を通して伝えようとされたメッセージは、私たちのあがないです。あがないというのは、私たちがイエスさまの恵みにあずかり、救いの完成に向かって成長していくことです。ですから聖書を正しく読むことはきわめて重要です。

もし私たちが奉仕の機会を与えていただいて、聖書のメッセージを伝える立場に置かれたとしたら、聖書のメッセージを正しく受け取ることが重要です。自分の思い込みで間違ったことを伝えたら、そ

れを受け取ってくれた人たちに大変申し訳ないこととなります。

さて、聖書を読むと、ひと言で言いますが、実は三つくらいの段階があります。

- (1) 知的に理解する—解釈する（歴史的意味）
- (2) 霊的にわかる—恵まれる（霊的意味）
- (3) 実際に適用する—生きる（現代的意味）

この三つです。この三つのプロセスを経て、私たちは初めて聖書を読んだと言うことができます。もちろん、この三つはきれいに分けることはできません。この三つを一气にしてしまうこともあれば、三番目の現在の意味がわかったあとに、もう一度知的に理解するというプロセスを経ることもあります。知的に理解できて、霊的に恵まれることもあります。読む人の信仰の状態などによってさまざまです。

知的に理解する

第一に、知的に理解するということについて考えます。聖書は聖霊の助けをいただいで心で読むものですから、心に響かなければ聖書のかなりの部分はピンときません。救われたあと聖書の意味がわかるようになったというのはそのようなことだと思います。しかし同時に、心のアンテナを広げ、心

を敏感にしながら、与えられた知性を最大限生かして読まなければなりません。

知的に理解することに警戒される方もあります。信仰が頭の問題になるのではないかという懸念です。場合によっては、そのとおりだと思います。しかし神さまは私たちに、人間の大切な一部として知性を与えてくださいました。与えられた賜物を最大限生かすのは私たちの責任です。特に神さまのメッセージであるみことばを受け取るときに、その賜物が発揮されないというのはナンセンスです。

霊的にどうでもよいということではありません。みことばに向き合い、そのみことばの意味を改めて知的に理解するときに、さらに深い霊的な恵みが発掘されます。これはことばにならない感動的な経験です。その意味で、知的であることと霊的であることは矛盾しません。人間は理性も知性も肉体も感情もすべて包括的に兼ね備えている統合体であり、神さまによって、「非常に良かった」と評価を受けている存在です。聖書は、心と頭を用いて読むものです。それでなければ、神さまに失礼です。

ところで、この第一段階のプロセスは、聖書が自分に何を語るかを見極める作業ではありません。聖書が書かれた文脈で、だれがだれに何を言おうとしたのかを読み取ることです。たとえば、パウロ書簡であれば、書き手はパウロであり、読み手は、私たちではなく、当時の読者です。ですから、パウロが私に何を言いたいのかを探るのではなく、パウロが当時の手紙の受け取り手に何を言いたかったのかを知るといふことです。聖書を読むと、自分への語りかけがほしくなりますが、まずは文脈上の読者への語りかけを読み取ります。

霊的にわかる

第二段階は、霊的にわかるということです。恵まれる経験と言ってもよいかもしれません。当時の読者に何を伝えたかったのかを読み取る段階を経て、今度は神さまが自分に何を語ろうとしておられるのかを探ります。

この時に大切なのは、自分の信仰体験です。クリスチャンになる前と後とでは、聖書の理解度はまったく違うはずです。頭ではわかっていても心ではわからないということが起きます。聖書を読むというのは、頭だけの作業ではありません。心で読めなければ読めたことになりません。

第一段階の知的な理解と第二段階の霊的な理解はどちらも大切です。第一段階だけがあって第二段階がないような読み方は、正しい聖書の読み方ではありません。それは学問です。第二段階だけがあって第一段階がないような読み方は、これも正しい読み方ではありません。記者を用いて聖書を書かせた神さまが、伝えたいと思っておられることを誤解する可能性が高くなります。

みことばの奉仕をする場面では、第一段階が強くて、第二段階の理解が体験的でないときには、リアリティーの欠如したみことばの解き明かしになります。知識がちりばめられているという印象、力が入っているが何も伝わってこないという印象の奉仕になるかもしれません。私たちが信仰生涯において、どれだけ正直に自分と向き合い、どれだけ真実に神さまの恵みを求めているかが問われる部分です。

第三段階は、実際に適用するという事です。第一段階、第二段階を経て、次にはそれをどう生きるかということに思いが向くことが大切です。みことばからの語りかけを自分への語りかけとして受け取ります。場合によっては、聖書に自分を批判してもらいます。改めるべきことがあれば改め、すべきことがあればへりくだって新しい一歩を踏みだします。

人間は、その人の人生観、習慣、考え方など、自分が持ってきたものをなかなか手放しません。持っているものが心地良いからです。グループではそのグループの持つ慣習があり、教会にはその教会の伝統があります。

聖書を大切にする姿勢とは、聖書が自分の人生観や伝統のしもべになるのではなく、聖書をこれらの上に置くということです。もちろん伝統や慣習の中には、聖霊の導きのもとに育まれてきたものもありますので、丁寧に調べもせずにあらゆることを否定するのは良いことではありません。しかし、最終的な判断をしなければならぬときにはやはり聖書の声に耳を傾けることが必要になります。特に個人の場合、自分の持っている人生観、習慣、ものの考え方、人格のあり方などをみことばによってさばいていただくという謙虚さが、信仰の成長のために欠かせないでしょう。

この意味で、みことばの第一義的意味をとらえることは重要です。「このみことばはこういう意味だ」というように、何となくイメージが定まってしまっていて、心を静かにしてみことばの声に耳を

傾けようとせず、またその解釈で本当に良いのだろうかという問いかけもしないというのもあまり良いことではありません。

ここで大切なことが一つあります。それは聖書が文化の服を着ている文書だということです。ただ聖書に書かれていることを実践すれば良いというわけにはいきません。もちろん、今の時代にそのまま直接適用して良いものもあります。しかし、文化的な意味が含まれているみことばの場合には、そこに書かれている文字をそのまま実践するのではなく、そこに意図されていることを汲み取って実践する必要があります。特に旧約聖書にはそのような言及が多いと思います。ですから、みことばの意味をとらえるために必要になるのが、文脈を理解することです。これについては後ほど詳しく説明します。

聖書を知的に解釈し、霊的にわかり、自分の実際に適用し、自分をさばいてもらう、ここまでやって初めて聖書を読んだということになります。自分をさばいてもらうのは時として痛みを伴うこともあります。みことばに照らされるときは痛みには恵みがあります。またイエスさまの温かさがあります。

みことばを解き明かす奉仕があります。牧師の説教も、教会でのお勧めも、また教会学校での奉仕も、みことばを解き明かす大切な奉仕です。専門職としての牧師であれば、以上の三つのステップを心に留めながらみことばに向き合うことが大切だと思いますが、信徒として社会生活を送りながら教

会の奉仕に携わっている方々は、忙しくなかなか、時間を十分取ることができないかもしれません。しかし、聖書を読むとはこのようなことであるということを知っておくのは大切です。どこかで時間が与えられたときには、この三つのステップを心に留めながら、そこからメッセージを汲み取っていただきたいと思います。

繰り返しますが、聖書を読むときには、第二段階の「霊的にわかる」ことと、第三段階の「実際に適用する」ことがなければ意味がありません。しかし、第一段階の「知的に理解する」ことは限りなく重要です。第二段階、第三段階の土台になります。

第2章　そもそも聖書って何？

前の章では、聖書を読むときには三つの段階があり、その中でも、第一段階の「知的に理解する」ことが重要であることを心に留めました。そのことをさらに具体的に説明してゆく前に、聖書はどのような書物なのかを考えます。聖書の性質を理解しておくことは、第一段階がなぜ必要なのかを理解するために欠かすことができません。

神さまのことばである本

聖書は神さまのことばです。神さまは人間という記者を用いて、聖霊のご干渉のもとに聖書を書かせられました。聖霊のご干渉のもとに聖書が書かれたことを「靈感」といいます。

聖書は「原典において」誤りのない神さまのことばであると信じる立場を聖書信仰といいます。文章で書くとは簡単なのですが、実はいろいろな立場の人がいろいろな議論をしてきました。私たちは聖書の原本を手にするのができません。今残っているのはすべて写本です。聖書本文研究や聖書考古学の研究は、発掘された写本を比較したり、どちらが古いかを検証したりしながら、原典に近づく努力を重ねてきました。これらの研究成果によって、かなりの割合で原典に近いものが復元されていると言われます。しかしそれでも、原典ではなく写本です。

原典が手元になく、「聖書には誤りがない」という命題を科学的に検証することはできません。したがって、聖書には誤りがないとは、誤りがないことを科学的に検証したという意味ではなく、神さまのことばであるゆえに誤りはないと信仰をもって受け取るという意味です。

これは、信仰の本質を考えようとするとき、とても大切です。科学的に検証ができるから聖書には誤りがないと思いたいという気持ち強い人にとっては、信仰をもって受け取るというと、ある種の逃げのように聞こえるかもしれません。しかし、信仰は、神さまと人間との間に、愛と信頼を土台とした人格関係を構築することを目指すものです。神さまが目指しておられるのは、人格関係が含まれない無機質な関係でも、頭で理解できれば良い関係でもありません。信仰は私たちが神さまのオファ―に人格を用いて応答することです。もし、科学的に検証できたから受け取りなさいというスタンスであれば、神さまが望んでおられる全人格的な関係づくりは必要ありません。科学的に検証できること以上に、人格をもって受け取る姿勢が大切なのです。

靈感の意味

聖書は神さまのことばでありながら、人間が歴史文脈の中で記したものです。百パーセント神さまのことばでありながら、記者である人間が人間として書いたことになりません。神さまのことばを人間が書いたというのは、書いた人が自分の意思を放棄して記したということではありません。また、聖霊に突き動かされて夢の中にいるような状態で書いたのでもなく、頭脳は明晰だったけれども、聖霊の導きによってロボットのよう書いたというのでもありません。あるいは、天が開けて声がしたのを人間がそのまま記したのでもありません。

聖書は実際の歴史文脈の中で書かれました。そこには、記者たちの能力・賜物・性格・人間としてのものの考え方がそのまま生かされています。聖書はこの意味で、百パーセント人間のことばです。ここが非常に大切なところなのです。このことが実感としてとらえられないと、聖書をどのように読んだらよいかということがなかなか見えにくくなりますし、この本で紹介したいと思っている読み方もピンとこないかもしれません。

聖書は神さまのことばでありながら人間が記したものです。人間が人間として書いたという面を減らしてしまうことなく、聖霊が十分に働いておられたこと、これを靈感と言うのです。

受肉の意味

受肉ということがあります。キリスト教教理の専門用語です。「百パーセント神さま、同時に百パーセント人間」というもので、この考え方はキリスト教独自のものです。他の宗教にはありません。もし、キリスト教を一言で表現してくださいと聞かれたら、どのように答えるでしょう。いろいろな答えが可能だと思います。「神さまの愛」、「神さまの聖さ」、「信じて生きる意味」など、いずれもすばらしい答えです。しかし、少し神学的にこだわって考えると、「受肉」という言い方で答えることもできます。キリスト教のかなり大切な部分をひと言で表現できることばです。

イエスさまは神さまでありながら、人間に受肉されました。イエスさまは神さまであり、同時に人間です。五十パーセント神さまで、五十パーセント人間だったということではありません。百パーセント神さまであり、同時に百パーセント人間であったということです。これを神学用語で「神一人」と言います。

ところで、イエスさまが百パーセント神さまでありながら、百パーセント人間だったということは、この地上でスーパーマンではなかったということです。私たちのイエスさまイメージはあまりにスーパーマンに近いものがありますが、イエスさまはありきたりの、どこにでもいそうな普通の人でした。聖画の中のイエスさまには後光が差しているものがあります。しかしあれは、聖書から出てきたイエスさまのイメージではなく、ヨーロッパの芸術が作り上げた一つの絵です。聖書的な観点からする

と正確ではありません。

イエスさまは、すぐ隣にいても気づかないくらい、普通のおじさんでした。もしイエスさまが、私たちが出席している教会の礼拝に参加されたとします。「あのおじさん。どこの方だろう。服装もパツとしないし。」そして礼拝が終わります。講壇からおりてきた牧師さんが尋ねます。「今日はよくいらつしゃいました。初めてでいらつしゃいますか」などと、当たり前のように声をかけてしまう、そのような方だったということです。これはイエスさまを貶めているではありません。もし後光が差していると思つていたら、そちらのほうが本気で人間になってくださったイエスさまに失礼なことです。人間が生きている現場に、私たちと同じ人間になって実際に生きてくださったというメッセージがばやけてしまいます。そういう方であったからこそ、本当の意味で私たちの救い主になることが可能だったということです。

百パーセント人間にされたということは、文化の枠に縛られていたということです。文化の枠から自由にされている人間はいません。私たち日本人は、日本の文化に縛られて生きています。イエスさまは生粋のヘブル人でした。ヘブルの文化に自らを制限されました。ですから、もしイエスさまが異文化経験をされたら、私たちが経験するようなカルチャー・ショックを経験したのではないかと思えます。日本人であれば外国人のことはよくわかりません。わかろうとすればかなりの努力と心遣いが必要になります。イエスさまもヘブル文化以外のものに触れたときには、私たちが経験するようなもどかしさを感じただろうと思います。ハンバーガーを食べたら、大変なショックを受けたかもしれない

ません。これが実は、聖書の非常にパワフルなメッセージになっています。本当の人間であられたという事です。

ところで、「受肉」という考え方は、教会にもそのまま当てはめることができます。教会は、百パーセント神さまのものであり、同時に見えるところでは人間の集まりです。教会の起源は神さまです。所有権も神さまにあります。しかし同時に、人間が形成しているために、ある一定の社会性があります。これも受肉という考え方で理解しようとする、なんとなく収まります。このように、キリスト教の中心には、受肉という考え方があられるわけです。

人間が記録した本

イエスさまが「生けることば」ならば、聖書は「書かれたことば」です。先に述べたように、百パーセント神さまのことばであり、同時に百パーセント人間のすることばです。無限の方が、受け手である人間のことばを借りて、人間のことに自らを閉じ込め、ご自分が伝えたいと思ったことを伝えようとしたのが聖書です。このことは人間の限られた頭脳ではとても理解できませんが、とても大切な点です。神さまはご自分のメッセージを伝えるために人間を用いました。繰り返しますが、記者は人間です。ロボットではありません。人間が、ある歴史文脈で、人間であることを失わずに、神さ

まの靈感によって書いたのが聖書です。

さて、百パーセント神さまのことばであり、同時に百パーセント人が書いたことばを読み取るのですから、考えてみれば大変なことです。聖書が百パーセント神さまのことばであることを認めながら、人間が記述したことばであることを最大限活用して、そこに意味されている神さまからのメッセージを読み取るのですから。

聖書には記述した人の歴史背景があります。その人の思考パターンがあります。論理展開があります。気性や性格があります。これらのことをまったく考慮に入れないで聖書を読むよりは、これらの要素を最大限考慮に入れて読むときに、記者が伝えようとしたことを、より効果的に、より正確に読み取ることができるはずです。聖書を記すために神さまが用いられた人たちは、それなりの個性がありました。私たちの感覚からすると、中には変わった人もいたかもしれませぬ。しかし、基本的には理解不能の変人ではなく、私たちと同じ普通の人たちです。したがって、私たちが聖書を読むときには、私たちが持っている普通の論理展開がそこに表現されているはずで、それほど支離滅裂な書き方はしていません。

ですから、私たちが聖書を、論理のつながりや文脈を重視して読むときに、さらに聖書の記者が語るうとして、よく理解することができますし、間違った解釈からも守られます。これが、聖書を文脈で読まなければならない理由です。

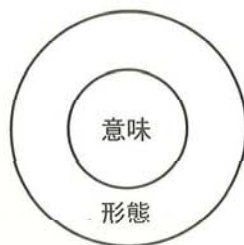


図1 意味と形態

コミュニケーションの考え方

聖書は、ご自分のメッセージを人間に伝えようとした神さまのコミュニケーションです。ここで、コミュニケーションとしての聖書を理解するために、コミュニケーションとは何かを簡単に説明しておきます。

意味と形態

まずコミュニケーションとは何かを理解するために、「意味」と「形態」について説明します。図1を見てください。これは文化人類学の考え方です。ものごとには必ず「意味」と「形態」があるということです。

「形態」とは、私たちの身のまわりにあるもので、とにかく形になっているものです。置いてあるもの、動作、文書、道具、何でもかまいません。見える形になっているものすべてが含まれます。

「意味」とは、必ずしも形になっていないもの、見える「形態」の背後にあるもの、概念、ことばにすらなっていないもの、「形態」のうしろにある理由、「形態」の持つ機能など、何でもかまいません。背後にある見えないものを指します。クリスチャンでいえば霊的な真理も「意味」に含まれます。

ここで確認しておきたいことは、「形態には必ず背後に意味がある」ということです。

私たちの身のまわりの出来事を考えてみましょう。たとえば、椅子に座る場面を考えてください。「椅子に座る」、これは形態です。見ることができる動作です。この場合の意味は、たとえば「疲れている」です。疲れているという見えない理由があって、この人は座っているということです。

一つの「形態」に一つの「意味」がマッチングしているのかというと、必ずしもそうではありません。一つの「形態」に複数の「意味」が隠れている場合もあります。一つの「形態」であっても、状況が変わることで「意味」が変わることもあります。

教室という場面を想像します。椅子に座っているという「形態」に対して、「生徒としての姿勢を取る」という「意味」があるかもしれません。日本では、教室で生徒は座るという慣例があります。ですからこのような「意味」はありえます。ほかにも「意味」はあるでしょうか。食卓を想像してください。椅子に座るという「形態」に対して、「食べる姿勢を取る」という「意味」があるかもしれません。このように、一つの「形態」について一つの「意味」があるのが普通です。場合によっては複数の「意味」があることもあります。

逆に、一つの「意味」に対して複数の「形態」がある場合もあります。たとえば、目に見えない「意味」として「感謝の気持ち」を想定します。感謝の気持ちは「意味」ですから、目に見えません。触ることもできません。行動によって示さなければ、それがあることすらわかりません。それでは、「感謝の気持ち」という「意味」に対して、どのような「形態」があるかを考えてみてください。

「『ありがとう』と言う」、これは感謝の気持ちという「意味」を表現し、見えるようにした「形態」です。しかし「形態」は必ずしも一つではありません。ほかにもありそうです。「黙って頭を下げる」、これも「形態」です。「お返しのプレゼントをする」、これも「形態」です。このように、一つの「意味」に対して複数の「形態」がある場合もあります。

「意味」と「形態」の組み合わせがミスマッチであることがあります。ミスマッチが起きると、ものがギクシャクします。その場合、一つの「形態」に適切な「意味」があるかを考える必要があります。

意味・形態論と信仰

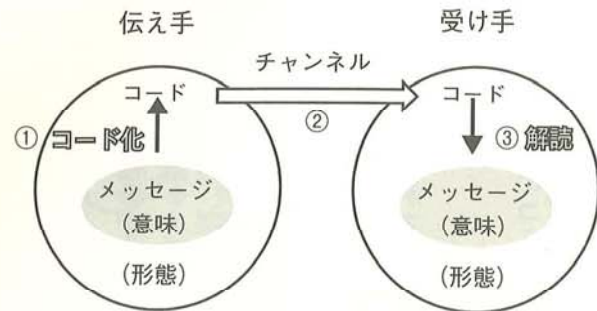
「意味」と「形態」の考え方は、私たちの信仰を考えると役立ちます。私たちはひと言で信仰と言いますが、実は信仰にも「意味」と「形態」があります。たとえば礼拝に出席することを考えてみてください。ここで「形態」は、教会堂まで行く行為であり、礼拝という集まりに出る行為であり、礼拝という様式に参加することです。「意味」は、神さまを礼拝する霊的な実態です。この「意味」を表現するために、教会堂にまで出かけ、礼拝という集まりに参加し、礼拝の様式に従って時を過ごします。

「意味」と「形態」には時としてミスマッチがあると述べました。たとえばどういふことでしょうか。一つの可能性ですが、礼拝に参加するという「形態」に対して、参加しないと人から何かを言われるかもしれないという恐れという「意味」があり得るでしょう。これは礼拝本来の目的からすると、ミスマッチです。そして、もしミスマッチであることに気づいたら、修正する必要があります。

さて、信仰を考えるときに、もう一つとても大切で、また決してあつてほしくないことがあります。それは、一つの信仰の行為をしているときに、「形態」だけが残って「意味」が失われている状態があり得るということです。それが何のために行われているかがわからないままに、ただ慣例として繰り返されているような状態です。これを「宗教の形骸化」と言います。イエスさまが福音書の中で何度も指摘されたのはこのことでした。どれだけ立派な形が残っていても、そこにどのような「意味」があるのかが見失われていたら、それは大変残念なことです。

形骸化は簡単に起きます。それくらい人間は弱いのです。同じことを何年も繰り返し続けて、形骸化がまったく起きないことなどあり得ないと言ってもいいだろうと思います。マンネリは多くの場合、形骸化です。

形骸化していることに気づいたら、私たちはどうすればよいでしょうか。一つの「形態」について、どういふ「意味」があるかを再確認することです。そのとき、一つの「形態」に適正な「意味」が見いだせなかったとしたら、選択肢は二つあります。一つは、その「形態」を意味のないものとしてやめることです。これには勇気が要りますが、思い切つて決断をすることです。二つめは、その「形態」に、もともとどのような「意味」があつたかを考え、正しい意味づけをし直すことです。このことは、日常的になされる必要があります。礼拝に出席したときに、形で流されればよいのではなく、



三つの要素(伝え手)(受け手)(メッセージ)

図2 コミュニケーションのプロセス

次に、「意味」と「形態」の考え方を基本にして、ものを伝えるとはどのようなことを考えてみましょう。図2をご覧ください。コミュニケーションのプロセスを図にしたものです。

まず「伝え手」は自分の伝えたいメッセージ「意味」を「形態」にしなければなりません。そのプロセスを①「コード化」と言います。何か目に見えるメディアを使って、自分が伝えたいことを見る形にします。多くの場合は言語です。次に「伝え手」は、②コード化された言語を相手に渡します。「受け手」はそれを受け取ります。「受け手」は受け取るだけでは不十分です。③それを解読します。解読とは、受け取った「形態」をメッセージ「意味」に戻すことです。これができることで初めてコミュニケーションは成立したと言えます。

一つひとつのプログラムがどのような「意味」を持つのかを心に思い浮かべることでも大きな違いがあります。

ところで、信仰は「意味」と「形態」のどちらと関係があるのでしょうか。どちらかというところ、「意味」と関わりがあります。もちろん信仰的な形態がまったく無意味だと言っているわけではありません。一つひとつの形態、儀式、慣例にはそれなりの伝統と意味があります。しかし、信仰は「形態」の領域の問題であるよりは、圧倒的に「意味」の領域の問題なのです。見える部分と見えない部分という観点で考えれば、信仰は見えない部分のことです。イエスさまがパリサイ人に対して強調されたのはこのことでした。神さまは、私たちの見えない部分を見ておられます。どのように表現したかではなく、何を表現したかったかが神さまの前には重要なことです。

この考え方は、実は私たちを自由にしてくれます。神さまが私たちの見える部分にだけ関心を持っておられるとしたら、これは大変です。おちおち礼拝にも参加できません。自分の身なりは整っているだろうか、献金の紙幣はヨレヨレじゃないだろうかなど、きりがありません。良い意味での開き直りができると、神さまが私たちの見えない部分を見ておられるというのはすばらしい恵みです。繕う必要があります。格好などどうでもよいと開き直ってしまえば、それは誠実な姿勢でないかもしれませんが、「形態」がパーフェクトでないと神さまから受け入れてもらえないとしたら、それはエンドレスです。真実な思いを持って礼拝に参加すれば、見えるところに多少の欠けがあっても、また心の思いが必ずしも聖人君子のようでなくても、神さまは恵みによってそれをよしとして受けとめてく

ださるのです。ですから、礼拝は自由なのです。

信仰は「意味」に宿ることを確認しておきたいと思えます。

ものを伝えるということ

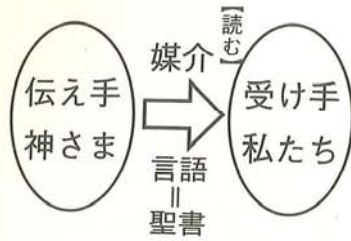


図3 神さまのコミュニケーション

神さまは言語という方法でご自分のメッセージを伝えようとされました。さまざまなプロセスを経て、記者が書いて記録に残す文書という形を取られました。

これは神さまの不思議な摂理です。言語は絶えず変わり続けます。日本語でも一つの単語に次から次へと新しい意味が付されていきます。口伝えであれば、何かの折に変わってしまうことは避けられません。その点、文書は、確かなものとして次代に伝えることができます。

神さまが文書という形でご自分のメッセージを伝えようとされたの

さてここで、このコミュニケーションの図式を聖書に当てはめてみます。まず、「意味」と「形態」について考えます。「意味」は本来の「伝え手」である神さまが伝えたいと思っておられるメッセージです。メッセージそのものは形になっていません。「形態」は言語です。神さまのメッセージが言語化されるのです。

神さまのコミュニケーション

ここで一つとても大切なことがあります。それは、プロセスの①から③のどの段階でも、必ずロスが起きるといことです。「伝え手」がメッセージをコード化するとき、実は伝えたいメッセージのかんりの部分が失われます。言語を相手に渡すときにもロスが起きます。そして、「受け手」が、受け取った言語をメッセージ「意味」に戻すときに、もう一度かんの部分が失われてしまいました。この三つのプロセスを経るときにどれくらいのもの失われるかは、状況等によってかなり違います。「伝え手」と「受け手」の距離感によっても大きく異なりますし、「伝え手」と「受け手」の文化的な枠組みが異なれば異なるほど、このロスは大きくなります。ですから、異文化でコミュニケーションするのは大変なことです。百を伝えたくて一しか伝わらないということはいくらでもあります。以上、おおまかですが、コミュニケーションとは何かを説明しました。

言語によるコミュニケーション

「伝え手」である神さまは、ご自分のメッセージを言語化し、それを私たちに伝えてくださいました。私たちはそれを受け取って、言語化されたメッセージを「意味」に戻します。これが聖書を読むということとです。言語化されたものをメッセージに戻す作業を、解釈あるいは釈義と言います。

さて、このプロセスを簡単に図にしてみます。聖書をコミュニケーションの角度からまとめたのが図3です。「伝え手」が神さまで、「受け手」が人間、そしてそれを媒介する「メディア」が言語であることを表しています。図では、コミュニケーションのコード化のプロセスは煩雑になるので省いてあります。

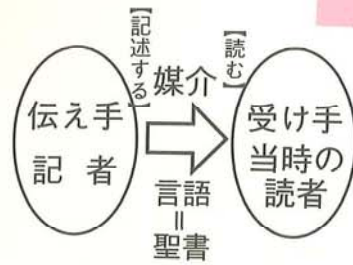


図4 当時の歴史文脈におけるコミュニケーション

先ほど、聖書は神さまのコミュニケーションであると述べました。図3をもう一度見てください。「伝え手」が神さまで、「受け手」が人間、そしてそれを媒介する「メディア」が言語です。そのうえで改めて確認しなければならないことがあります。それは、聖書が歴史文脈で書かれているということです。たしかに「伝え手」は神さまであり、「受け手」は人間なのですが、聖書が書かれた歴史文脈においては、「伝え手」は記者であり、「受け手」は当時の読者だったということです。図4を見てください。神さまは当時の記者に靈感を与え、ご自分のメッセージを書かせなさいました。実際に書いたのは人間、つまりその文脈での「伝え手」である記者です。さらに、その文脈で書かれた文書を、その文脈で読んだ読者がいたということです。それが「受け手」です。

文脈で書かれている聖書

神さまは読んでもらうことを期待されました。これは、愛と信頼を土台にした人格関係を構築することを目指しておられる神さまの知恵です。そういう向き合い方をしてほしいというメッセージです。聖書は私たちに、本気で向き合ってほしいと語りかけてきます。

また、いいかげんな姿勢で近づこうとすると、読む者を寄せつけないところがあります。聖書はインターネットではなく、読む者のスタンスや心のあり方に問いかけを与えてくるからです。ですから、「うかうか寝そべって読んでいられない」というところがあります。しかも、伝えたいことを箇条書きにでもしてくれればまだ話が早いのですが、聖書の各書は基本的に歴史をそのまま書いています。「ここが大切ですよ」というような付箋もついていません。ですから、どこが大切なのかを読み取る姿勢で読まないと、さっぱりわからないということが起きます。

しかし、読む者にわかりやすい書き方をしていません。まず著者がたくさんい過ぎます。四十人くらいではないかと言われます。しかも打ち合わせなしで、それぞれの歴史文脈で書かれていますから、書き方そのものには統一感がありません。ですから、歴史背景を理解しないと、とてもわかりにくくなってしまいます。聖書は、読む者にわかりやすい書き方をしていません。まず著者がたくさんい過ぎます。四十人くらいではないかと言われます。しかも打ち合わせなしで、それぞれの歴史文脈で書かれていますから、書き方そのものには統一感がありません。ですから、歴史背景を理解しないと、とてもわかりにくくなってしまいます。

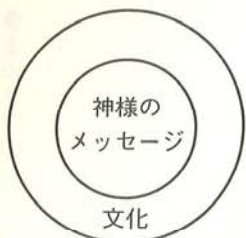


図6 文化の服を着た聖書

さらに、聖書は歴史文脈の中で神さまのメッセージが言語化されたもので、当然その時代の文化で表現されているはず。図6をご覧ください。

言語と文化は切っても切り離せません。何であれ言語化された瞬間、文化の服を着ることになります。聖書も同じです。文化は「形態」です。時代を超えた普遍性を持つものが「意味」です。ですから、聖書を読むときには、「形態」である文化と、「意味」である神さまのメッセージを区別する必要があります。それが文化なのか、普遍的なメッセージなのかを見分けることです。文脈を読んで、文化の服を脱がせ、神

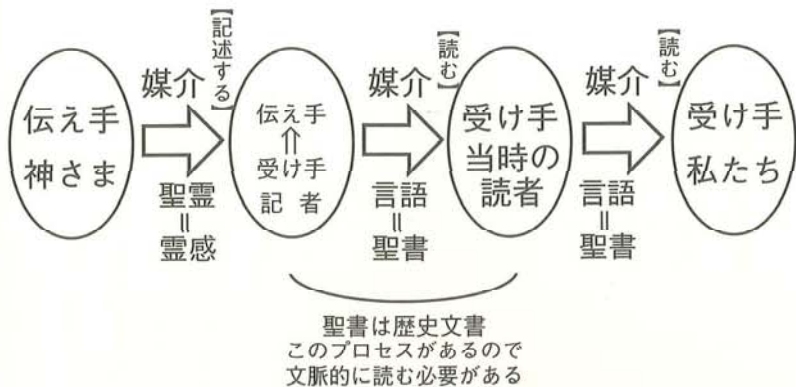


図5 神さまのメッセージが私たちに伝えられるまでのプロセス

これは非常に大切なことです。聖書を読むときに、どのような文脈で書かれたのかを考えて読まなければならないことを意味しています。逆に言うと、文脈を考慮して読んだほうが、コミュニケーションにおけるロスが減って、「伝え手」が伝えたいと願っていたことがわかりやすくなるということです。

このように、神さまという「伝え手」と私たち「受け手」の間に、その歴史文脈における「伝え手」と「受け手」が挟まっていることを見落とさないことが大切です。図3と図4をまとめると、図5になります。

ずいぶん煩雑ですが、このようなプロセスを経て、神さまのメッセージは私たちにまで届けられます。それが聖書です。実はここでもう一つ、さらにプロセスを複雑にしていることがあります。それは翻訳です。このことについては、第三章で詳しく触れます。

さて、この図から、聖書を読む際の大切な注意点が生じることになります。図3だけを意識して読むのもよいので

すが、図4も同時に意識し、図5であることを知って読むときに、「伝え手」である神さまが伝えようとされたことを、さらに正確に、さらに豊かにとらえることができるのではないかと思います。ここに文脈を考慮して聖書を読む意味があります。

解釈——文化の服を脱がす

繰り返しますが、聖書は、神さまのメッセージが言語化されたものです。「意味」と「形態」の角度から考えれば、「意味」は本来の「伝え手」である神さまが伝えたいと思っておられるメッセージ、「形態」は言語です。ですから、聖書を読むときに、それが「形態」の問題なのか、「意味」である神さまのメッセージそのものなのかを識別する必要があります。

さらに、聖書は歴史文脈の中で神さまのメッセージが言語化されたもので、当然その時代の文化で表現されているはず。図6をご覧ください。

さまのメッセージのエキスを取り出すという作業、これが解釈です。

旧約聖書はヘブル文化の中で書かれています。そこに表現されているメッセージを汲み取るためには、ヘブル文化の服を脱がせる必要があります。律法を理解しようと思ったら、「意味」である普遍律法と「形態」にすぎない祭儀律法を区別しなければなりません。たとえば、いけにえを献げることが祭儀律法なので普遍的意味を持ちません。ですから、現代のクリスチャンはまったく気にする必要がありません。神殿や幕屋や幕屋の調度品について細かく分析しても、あまり意味はありません。大切なのは、神さまはなぜそのようなことをするように民を導かれたのかという問題です。ザクツと、何が意味されていたのかということなのです。

出エジプト記二〇章に記されている「十のことば」を読むときも同じです。「十のことば」は社会のルールの根底にあるもので、かなり普遍的なものと考えられますが、一つひとつのことばがどのくらいまで普遍的なのかは注意深く読み解く必要があります。

それをしないで聖書のメッセージをそのまま受け取ると、おかしなことが始まります。旧約の神の民がしていたのと同じことを、現代に生きる私たち日本人クリスチャンがしなければならぬことになりません。まず、巡礼です。世界中のクリスチャンが毎年エルサレムに押しかけます。クリスチャンはいまだに毎日動物を献げなければならぬとありますし、礼拝は当然のことながら土曜日に行うこととなります。なぜ礼拝を日曜日に行うのか。それは、安息日の「意味」を理解したうえで、土曜日に行うという「形態」をはずし、イエスさまの復活を契機に、よみがえりのいのちを祝うという新たな

「意味」づけをして、日曜日に集まるという「形態」を与えたからです。「形態」は大きく変わりましたが、「安息日を覚えて」と神さまが言われた「意味」は、イエスさまの復活を祝うという「意味」が付け加えられたにしても、本質はそれほど大きく変わっていないと理解することができます。このように、解釈とは、聖書の文化の服を脱がせる作業です。これが、聖書を読むときに文脈を大切にしなければならぬ一つの理由です。

適用——文化の服を着せる

さて、文化の服を脱がせるという作業をしました。神さまのメッセージが取り出されました。それを自分の信仰と生活に適用します。

第一章の「聖書を読む三つのステップ」の項目をもう一度ご覧ください。

- (1) 知的に理解する——解釈する（歴史の意味）
- (2) 霊的にわかる——恵まれる（霊の意味）
- (3) 実際に適用する——生きる（現在の意味）

文化の服を脱がせる作業は、この三つの中の(1)です。注意深く文化の服を脱がせて、神さまのメッセージが取り出します。

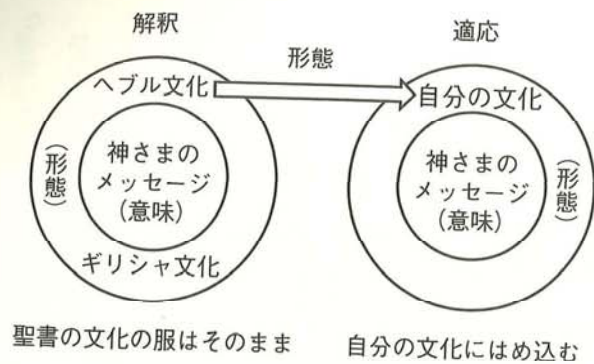


図8 間違った適用

「形態」のままそれを自分の文化に持つてくることです。図8
 「形態」のままそれを自分の文化に持つてくることです。図8
 をご覧ください。
 ヘブルやギリシャの文化で表現されているみことば、すなわち「形態」を、一度神さまのメッセージ、すなわち「意味」に戻すプロセスを省き、ヘブルやギリシャの文化で表現されている「形態」をそのまま自分の文化に持つてきて、無理やりはめ込みます。そうすると、大変な不協和音が出てきます。たとえば、祭儀律法をそのまま日本文化に持つてくるのがこれです。また、牧師が説教するとき、みことばを適用するプロセスで、みことばに表現されている「意味」が正しく取り出されず、「形態」を、聞いてくださる方にそのまま当てはめると、大変なギクシャクが生じます。「具体的に〜しなさい」調の説教に

教を聞いてくださる方の文化の服を着せます。「きょうの説教を聞いてくださる方は、どういう文化の中で生きているのだろうか。どういう生活空間の中で生きておられるのだろうか。どのような社会生活を送り、どのようなことで悩まれるのだろうか。会社に行かれたら……。」このように考えていきます。みことばの「意味」を自分の文化「形態」の中で実践しようとするとき、やってはいけないことがあります。それは、ヘブルやギリシャの文化の服を脱がさずに、「形態」のままそれを自分の文化に持つてくることです。図8
 をご覧ください。

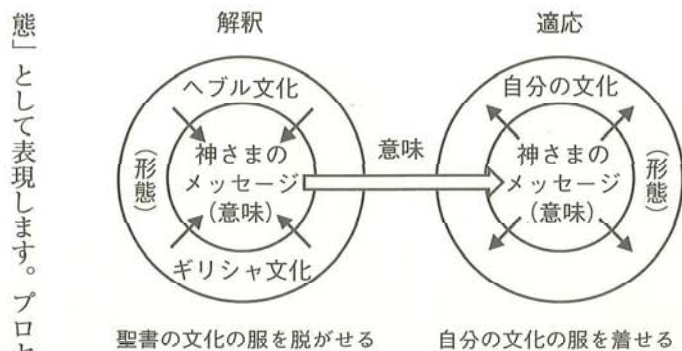


図7 解釈と適用

「形態」として表現します。プロセスがスムーズにいきます。
 牧師が説教をするのはこのプロセスを踏むことです。みことばを解釈します。文化の服を脱がせません。次に、みことばを適用します。自分の文化の服を着せません。しかしそれだけではありません。説

もしそのメッセージが自分の信仰体験と合致するものであれば、とても恵まれます。信仰的に未開拓の領域で、新しく教えられるということがあれば、やはり恵まれます。これが(2)のプロセスです。
 次に、そのメッセージを自分の信仰に適用します。それが(3)のプロセスです。そのときに何をするかというと、(1)のプロセスでは、ヘブルやギリシャの文化の服を脱がせましたが、今度は(3)のプロセスで、自分の文化の服を着せる必要があります。見えない「意味」は、見える文化「形態」を使わなければ表現できないからです。図7をご覧ください。
 まず、ヘブルやギリシャの文化で表現されているみことば、すなわち「形態」を一度神さまのメッセージ、すなわち「意味」として取り出します。それを自分の文化に持つてきて、そのメッセージ、すなわち「意味」を、自分の文化の中で「形態」として表現します。プロセスがスムーズにいきます。

なっております。

祭儀律法をそのまま日本文化に持ってきて、クリスチャンが幕屋を作り始めたらだれでもおかしいと感じると思いますが、私たちクリスチャンの生活を考え直してみると、実はこれはかなり微妙な問題を含んでいます。私たち信仰者が当たり前のようにやっていることが、はたして聖書のメッセージを抽出したものとこの問題です。これは宣教学の領域に入りますので、他の機会に譲りますが、文化「形態」を「意味」に戻さずに、そのまま私たちの信仰の実践に当てはめているものもあります。ある意味、「形態」を適切に引き継いでいればそれでかまわない面もありますが、自分の信仰の実践が、ただ「形態」を真似しているだけのものか、あるいは聖書に表現されている「形態」を「意味」に戻し、その「意味」を自分の実践の中で「形態」に表現したものは絶えずチェックする必要があります。

このチェックでは、「意味」であるメッセージを「形態」に表現するという方向性が決定的に重要になります。「意味」があつて「形態」があるのであつて、「形態」があれば、必ずしも「意味」があるとは言えないからです。

一つだけ具体例を挙げます。この書の最初で通読の話をしました。通読をなぜするのか、通読することは「形態」です。通読していることが偉いものではありません。それでは、その「意味」は？ ぜひ考えてみてください。それでは、その「意味」がわかったら、それを自分の生活空間の中で、どのような「形態」に表現するのが今の自分に一番フィットしているのか。これも考える必要があります。

第3章 聖書は日本語で読む

第二章では、聖書がどのような書物か、聖書を読むとはどのような作業なのかを考えました。ここで一つ、大切な問題が残っています。それは聖書原語と翻訳の問題です。第二章で説明した考え方に基づいて聖書を読む限り、必ずしも聖書原語を学ぶ必要はありません。

この章では、聖書原語をどのように位置づけるかを心に留めながら、二つの翻訳論をご紹介します。なぜ翻訳でよいのか、その理由を考えます。

原語で読まなくてもよい本

聖書を学ぶためには、聖書原語をやらなければ本当のところはわからないと思っておられる方もあ

るかもしれませんが。ところが、私たち現代のクリスチャンは必ずしも聖書を原語で読みません。それでは、神さまが伝えたいメッセージはわかっていないということなのでしょうか。

神さまはご自分のメッセージを人間に伝えるために、ヘブル語とギリシャ語を選ばれました。なぜであるかはわかりませんが、時制の問題など、その言語の特質を考えると、なるほどとうなずける面もあります。

ところで、私たちのほとんどが日常的に読んでいる聖書は日本語の聖書です。多少手を伸ばしてもせいぜい英語の聖書くらいで、なかなか聖書原語まではいきません。しかも日本語の聖書ですから、翻訳です。

それでは、翻訳された日本語の聖書で聖書を学ぶだけでは不十分かというところ、決してそうではありません。私たちにとっては日本語の聖書で十分です。説教の準備のために聖書原語を確認することもあります。説教で聖書原語を引用する場合は注意と慎重さが必要です。なぜなら、受け手の立場に自分を重ねれば、聞いてくださる方にとってはわからない世界だからです。「上から目線」と受け取られ、心を閉ざしてしまわれるかもしれません。また、下手に英語の訳などを引っ張り出すと、知ったかぶりの雰囲気になって、かえって陳腐になる可能性もあります。

聖書学の知見から学ぶ姿勢

聖書は原語で読む必要は必ずしもないと考えたところで、聖書原語を学ぶ聖書学には意味がないと申し上げているわけではありません。聖書原語の研究は大切です。聖書原語専門の方から多くのことを教えていただきます。聖書原語の意味を突き詰めて考えていくことで見えてくる世界もあります。興味があり、主の導きがあるのであれば、ぜひ聖書原語を学んでください。

しかし、私たちの大部分はそんな余裕がありませんし、それぞれ実際の生活があり、アカデミックな生活をするようには導かれていません。ですから、聖書原語の研究は学者の方にお委ねして、いろいろ教えていただくだけで十分でしょう。

聖書を読むことと聖書原語の研究とは違う世界の話です。聖書原語の研究は学問であり、相対的です。新しい学説が出れば、古い学説は否定されます。しかし、聖書を読むのはスピリチュアルな問題であるという意味で、相対的な学問とは次元の異なる世界の話です。私たちが生きることに関わる問題です。

そういう意味で、聖書原語の知見から教えられることはありますが、聖書原語を知らなければ聖書を読んだことにならないということはありません。また不足ありません。それでも少し心配になる

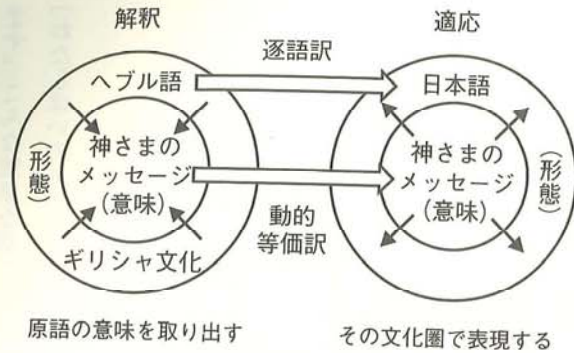


図9 聖書翻訳のプロセス

も、その文で表現されている内容、すなわち「意味」を考慮し、それを、翻訳する相手の文化の中で、どのようなことばで表現するのが一番良いかを考えます。いわゆる、「動的等価訳」(dynamic equivalence translation) という考え方です。ですから、必ずしも一語一語がマッチングしません。一語一語のことばよりも、その文章が何を伝えようとしているのかを大切にします。もちろん、「意味」が伝わればよいというように発想の転換をしても、メッセージのロス（ゼロ）にすることは不可能です。この場合でも、原典の香りの相当な部分が飛んでしまうだろうと思います。

二つの翻訳論を図にすると図9のようになります。

逐語訳が「意味」を考えないわけではもちろんないと思います。また、ほとんどの箇所では、それほど「意味」にこだわらなくても問題は起きないでしょう。しかし、場合によっては、そのことが聖書の文化の中でどのような「意味」を持っているのかを十分に考慮し、それを日本の文化でどのように表現すればよいかを丁寧に考えなければならないケースもありそうです。逐語訳は一語一語を大切にするため、翻訳される側の文化圏からすると、どうしてもちぐはぐな訳語になる可能性があります。

と思います。やっぱりヘブル語やギリシャ語のわかる人がいると、なんだか偉そうな気がしてしまいます。しかし、聖書は日本語で読めば十分というのには、福音の本質と関わっている深い理由があります。聖書は原語で読まなければならないという考え方は、突き詰めていくと福音の本質と矛盾してしまうのです。ですから大切な問題です。

二つの翻訳論

ここで、聖書翻訳について考えてみます。聖書翻訳には二つの考え方があります。一つは聖書学的視点、もう一つは宣教的視点です。

聖書学的視点とは、聖書の一語一語を大切に、聖書原語を日本語に置き換えていきます。いわゆる「逐語訳」(word for word translation) です。「翻訳を見ても原語が推測できる」という理念で翻訳されるケースもあります。これはある意味での長所です。ところが、コミュニケーションのところで説明したように、どれだけ一語一語を正しく置き換えることができても、メッセージのロスは避けられません。逆に、一語一語が置き換えられるという考え方が縛りになってしまう可能性もあります。実際のところ、原語の香りの相当な部分が飛んでしまうと言われています。

宣教的視点とは、聖書の一語一語は大切にしますが、一語一語、すなわち「形態」より

ます。こんな簡単な話ではないのですが、たとえばわかりやすい例では、パンを知らない文化圏で「わたしはいのちのパンです」と訳せるかという問題です。

宣教学的翻訳論と福音の本質

聖書学的視点に立った聖書翻訳には前提があります。ヘブル語とギリシャ語だけが特別だという前提です。たしかに神さまが用いてくださったという意味で他の言語と違うのですが、もしそうだとすると神さまは不公平な方になりかねません。

さらに、ヘブル語とギリシャ語だけが他の言語と違うという理解に立つと、福音の本質である「受肉」の考え方と折り合いがつかなくなります。受肉の考え方は、神さまはどの文化・言語にも受肉される方向性を持っているとします。一時的にヘブル語とギリシャ語が用いられたにせよ、すべての言語に優劣はないという理解に立ちます。ですから、聖書学的視点と宣教学的視点では、翻訳することの意味も変わってきます。キリスト教の本質である受肉の考え方との関わりで見ると、どうやら宣教学的視点のほうに分がありそうです。

誤解しないでください。聖書学的な翻訳には意味がないと申し上げているわけではありません。学的な業績が十分に活かされた翻訳はなされるべきです。しかし、宣教学が神学の一分野ではなく、一つ

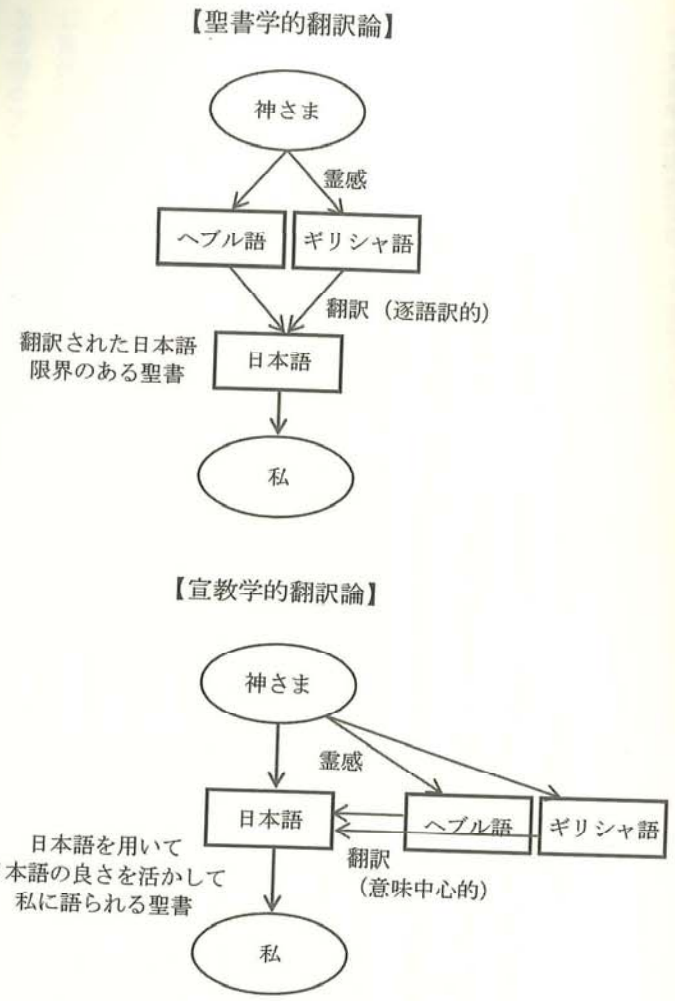


図10 聖書学的翻訳論と宣教学的翻訳論

の分野として独立するくらい急激な発展をしてきている昨今、宣教的な視点に立った聖書がまったくと言ってよいくらいないために、新しい翻訳が待たれているということだ。

宣教的視点に立つと、ヘブル語やギリシャ語は神さまの摂理の中で用いられたけれども、神さまの前には日本語と重さは変わらないと考えます。「翻訳するときに飛んでしまう原語の香りはどうするのか」という批判は聖書学的視点から出るかもしれませんが、一語一語を意識する傾向になりやすい聖書学的翻訳と、意味を意識する宣教的翻訳とで、どちらが原語の香りが削れてしまうかは、また別の問題として検証する必要があります。

かりに、一語一語を大切にしなければ原語の香りがなくなってしまうという批判が出たとしても、宣教的翻訳論では逆説の発想でいきます。一語一語をどれだけ意識したところで、それで本当に原語の香りが減ってしまうのを防げるのかという反論も出るでしょうし、さらに積極的に、「かりに原語の香りが飛んでしまっても、公平な神さまの前には、聖書原語も日本語も同じ重さであり、神さまは日本語を愛しておられるはずだから、むしろ原語にはない日本語の良さを神さまは豊かに用いてくださるはずだ」と考えます。そうだとすると、日本語の聖書は「日本語を用いて、日本語の良さを生かして、日本人である私に語られる聖書」になります。二つの翻訳論の違いを図にすると、図10のようになります。

宣教的視点に立った翻訳では、基本的に、読む人が日常使っていることばを使います。ですから、読む者の心にダイレクトに、しみりと響きます。日常のことばが使われていない聖書を読む場合は、実は心の中で一度翻訳しながら読んでいます。場合によっては無意識にしているかもしれません。一つのプロセスが挟まってしまったために、心に直接響きません。

大変残念なことに、現在日本語に訳されている聖書は、公的なものも含めてどれも聖書学的視点、すなわち「逐語訳」傾向で訳されたものがほとんどであると言われます。私たちが日常生活で使わないうことばが何度も登場します。そのたびに頭の中で、日常使い慣れていることばに置き換えなければなりません。しかし、福音の拡大のためには、宣教的な、読んだだけで心に響く聖書がどうしても必要だと言われています。そういう意味で、アメリカなどでは、聖書翻訳のチームに、宣教学者や文化人類学者が入ります。日本語聖書も、今後に期待したいと思います。

翻訳を考えるときに宣教的視点に立つ必要があるのは、福音を有効に伝えるための一つのツールになるからというだけではありません。それ以上の意味があります。キリスト教そのものが翻訳されなければならないという本質を持っているからです。

キリスト教は受肉の宗教、翻訳の宗教です。真理、すなわち「意味」が、ことば、すなわち「形態」に受肉する宗教です。その最も典型的なモデルが、人となってくださったイエスさまご自身です。そして神さまのことばである聖書です。またその聖書の真理は、聖書原語だけでなく、私たちの言語にも受肉し、翻訳されるべきものです。神さまは愛と公平の方ですから、世界中の人たちがヘブル語とギリシャ語を学ばなければご自分のこと本当のところわからないとおっしゃいません。

「エルサレムに來なさい」は旧約の発想です。新約の発想は「エルサレムから出て行きなさい」

です。聖書も同じです。ヘブル語、ギリシャ語の枠から出て、「めいめいの国のことばで」(使徒二・八)表現されるべきものです。翻訳されたものを読むことで十分に神さまの恵みがわかるといふ性質を持った本なのです。

ですから、翻訳の作業は重要です。ことば、すなわち「形態」を置き換えるだけでなく、真理、すなわち「意味」を可能な限り正しく、しかも翻訳される側の文化の中で適切に表現する必要があるのです。このようなプロセスを経て、聖書はなるべくたくさんの言語に翻訳され、どのような文化と言語を持った人であっても、自分の文化と言語を通して、神さまのことが直接的に、そして平易にわかるべきなのです。神さまが私たちにメッセージを伝えるために、私たちが話す日本語と日本文化を貴く用いてくださると信じたいと思います。日本の方言の聖書、いわゆる「お国」で話されていることばの聖書があるとおもしろいかも知れません。

このように、キリスト教の本質から考えて、私たちの信仰の実践のレベルでは、聖書を原語で読む必要はないと考えることができます。聖書原語ができなくても、何の引け目も感じる必要はありません。日本語の聖書は翻訳ですが、本当は原語を調べなければ意味がわからないような「二番煎じ」ではありません。私たち日本人は、神さまが創造してくださった日本人が親しんでいる日本語の聖書を読むことで十分です。かりに原語の香りが翻訳のプロセスで飛んでしまっても、神さまは逆に日本語のすばらしさを豊かにふくらませて、恵みを十分に伝えてくださるはずで

す。聖書はどのように読むかが大切です。第二章で述べた聖書の性質を十分に考慮すれば、原語の意味

を一点集中で突き止めるような発想ではなく、翻訳であっても文脈を大切に読んで読むことで十分です。あなたが普段親しんでいる言語で翻訳されている聖書を大切にしてください。

第4章 聖書読みのコツ

第二章と第三章では、聖書がどのような本か、なぜ翻訳で十分なのか、なぜ読むときに文脈を大切にすることが必要であることを学びました。

この章では、文脈を大切にするときには押さえておくと助けになる発想をご紹介します。実はこれは、微妙な問題を含んでいます。これをあまりやり過ぎると、いつのまにかそれが肥大化して「神学」になり、ウェスレーアの神学ではこういう結論になるとか、カルヴァンの神学ではこういう翻訳になるとか、あまり建設的でない議論が始まります。そうすると、最初からファイナル・アンサーありきの読み方になります。

ここで申し上げたいのは、いわゆる「救いとはこういうことです」とか、「神の愛とはこういう意味です」とかいう神学のことではなく、聖書を読むときに心に留めておくと助けになる発想、つまり「原則」です。

これは、みことばに向き合ってきたなかで私なりに理解しているものですが、自分がどのような意味でイエスさまに出会ったのかという体験的な部分とも深く関係しています。一つの見方ですが、これを理解していただくことで、聖書を読むときの見通しが良くなればと思います。特に最初の恵みの原則を理解すると、いろいろな文脈がギクシャクしなくなります。

恵みの原則——逆説で書かれている

聖書を読むためのコツの中で、どれよりも大切なのがこの恵みの原則です。

聖書が語る「恵み」は、「報酬」との違いを考えるとよくわかります。報酬は、こちらに理由があって受け取ることができるもの、恵みは、こちらに理由がないのに受け取ることができるものです。これは似ているようで、かなり違います。

報酬の原則は、一日これだけ頑張ったからこれだけのものがいただけるという考え方です。「AだからB」、つまり原因があつて結果があるという考え方、「原因・結果論」です。他方、恵みの原則は、ぜんぜん頑張れなかったにもかかわらず、ただけるといふ考え方です。AとBの結びつきがゆるい状態、あるいは、はずれている状態と言つてもよいかもしれません。「AにもかかわらずB」です。つまり、逆説です。聖書は逆説で書かれています。この二つの考え方をまとめたのが図11です。Aと

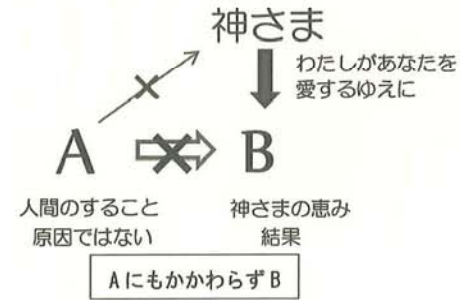
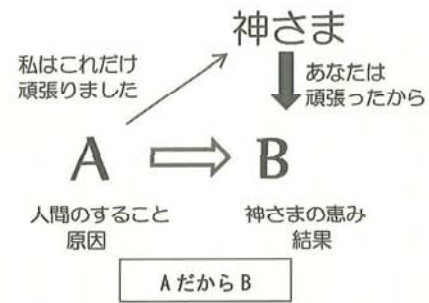


図11 「だから」と「にもかかわらず」

チャンとしての生涯の現実です。

そうすると、質問が出ます。「信じたから救われたわけではありませんか。」これは一見、報酬の原則に見えます。たしかに信じたのですが、信じたことと引き換えに、その報いとして救われたわけではありません。罪ある私を救ってくださったのは、百パーセント神さまの恵みです。「祈ったから神さまの恵みが注がれたのではないのですか。」これも同じです。祈ったことと引き換えに、その報いとして祈りの答えが与えられたわけではありません。祈りの答えも、一方的な神さまの恵みです。

信じることや祈ることを否定しているわけではありません。人間が信じるか信じないかにかかわらず、神さまの絶対的な権限だけで救われるから大丈夫だという意味でもありません。聖書には「信じなさい」という言い方が何度も出てきます。聖書は、信じることに一定の意味を与えています。私たちは実際に信じます。しかし、それにもかかわらず、信じるのが神さまの恵みを引き出すカードにはならないということです。恵みが注がれるのは、人間の側に何かふさわしいことがあったからではなく、一方的な神さまの愛と配慮のゆえなのです。クリスチャンの人生は、「AだからB」ではなく「AにもかかわらずB」に生きることであります。

ここがぶれると、大変なことになります。一見小さな違いに見えますが、実は本質的に大きな問題が出てきます。信仰の成長も、人間の側に何か立派なことがあったから手にしたものになってしまいます。信仰年限が重なる、信仰的プライドがますます高くなり、自分は人のことを指導できる立派な人間だという思い込みにはまり込みます。そうすると、教会の中に序列が出来上がります。これはイエスさまが福音書で指摘された律法主義です。イエスさまが描かれた神の国とは異質のものであります。信仰の成長は、自分の実質を学ぶプロセスです。イエスさまを信じた時よりも、もっと自分の姿が理解できるようになり、自分は人のことなど指導できる人間ではないのだということがわかります。私は牧師ですが、牧師はある意味で、人のことを指導する仕事ではありません。自分の実態を知ること、人に寄り添うことを学ぶのがその仕事です。

恵みの原則で聖書を読むとき、一つ心に留めておきたいのが、その解釈がイエスさまの描かれた神

Bの連結をはずしておくことが大切です。

少し考えてみてください。クリスチャンとして生きてきた歩みを振り返って、いたいた恵みに対して、自分がそれにふさわしいことをしたらただと開き直れることがどれだけあるでしょうか。足りない「にもかかわらず」いたっているのが私たちのクリス

の国と合っているかという点です。イエスさまの描く神の国とはどのようなものなのでしょうか。ひと言で言うと、序列が終わった世界のことです。「神さまにやっていただく」という恵みの原則が支配する世界と言うこともできます。

なぜイエスさまは、まっとうに生きようとする律法学者・パリサイ人に対して厳しい評価をし、身を持ち崩した女性に対して責めのことばを言われぬのか、これは人間の尺度では理解できません。イエスさまが示された罪の尺度は、人間が考えているのとはかなり違います。神さまが恵みを注いでくださるのは、人間の側に何か立派なことがあったからではなく、神さまの愛のゆえです。ですから、人間が神さまの恵みを受けることができるかどうかは、神さまの恵みを恵みとしていただく姿勢が取れるかにかかっています。そして、恵みをいただくという姿勢を一番妨げてしまうのが、皮肉なことに人間の真面目さなのです。ですから、聖書は宣言します。

「神の国は、人間の真面目さだけではダメだ」

実際、神の国では人間の真面目さなどあまり意味がありません。真面目さそのものに意味がないと申し上げているではありません。真面目に生きるのはすばらしいことです。しかし、それがあれば神さまの恵みをゲットできるということではないということです。逆に、真面目であればあるほど神さまの恵みから遠ざかってしまうという皮肉な現象すら起きます。

この線で進んでいくと、聖書には人間の尺度からするとおかしなことばかり書かれていることに気づきます。たとえば、人のものを奪って平気なヤコブがなぜ神さまの祝福を受けるのか。人を殺したことのあるモーセが、なぜ神さまの大仕事を任されるのか。教会をいじめ抜いたパウロが、なぜ初代教会の建設と、キリスト教神学の大綱をまとめるという大仕事を任されるのか。イエスさまを裏切ったペテロが、なぜ初代教会のスタートで重責を担うのか。ヨハネの福音書八章の女性が、なぜイエスさまから何も言われないのか。ルカの福音書二三章に記されている十字架の場面で登場する強盗が、なぜそこでパラダイス行きを約束してもらえるのか。五時にぶどう園に来た人が、なぜ他の人と同じだけの額をもらえるのか。イエスさまの弟子として選ばれたのは、現代の会社でプロジェクトを立ち上げようとしたときにはまずプロジェクト・チームに入らないだろうと思われるような人たちばかりです。経歴もなければ、素養も学歴もありません。腕っ節は強くても、デリカシーのかけらもありません。だからこそ「憎めないヤツ」なのかもしれませんが、それにしても、教会をスタートさせる世界の大仕事のプロジェクト・チームにはとてもそぐわない、変わり者ぞろいです。しかも、忠実さが売りかと思いきや、それもなく、弟子たちはイエスさまを裏切る人たちでした。人間の常識で考えると納得のいかないことばかりです。

実際、聖書の中に登場する人物で、神さまに貴く用いられたのは、人を殺した経験のある人たちです。先に見たように、モーセは若いときの失敗とはいえ、業務上過失致死罪。ダビデは、今とは常識のまったく異なる古代王朝物語とはいえ、殺人罪。パウロもクリスチャンをいじめ抜いたことは述べたとおりです。捕まえては投獄し、そのことでのちを絶たれた人もいたかもしれませぬ。

聖書の常識は、私たちが現代のクリスチャンの常識とかけ離れています。今の時代、こういう前歴の

裁判官で守る
場合もある
正しい人であれば

ある人たちが牧師として奉仕していることがあるでしょうか。また、私たちはそういうケースを温かく認めるでしょうか。神さまの目から見れば、本当は、自分もイエスさまを裏切ったペテロやユダと変わらないはずですよ。

このように、人間の尺度からすると、わからないことだらけの聖書なのですが、実は一つの尺度を確認するだけでスキッと読めてしまいます。それは「AにもかかわらずB」の原則、つまり恵みの原則です。どの例を見ても、「にもかかわらず」なのです。

恵みの原則、「AにもかかわらずB」の発想で聖書を読んでみてください。

神イメージの原則——裁判官から父・牧者へ

恵みの原則と並んでもう一つ大切な問題があります。連動していると言ってもよいと思います。それは、神さまをどのようにイメージして聖書を読むかということです。

私にとって神さまは長いこと裁判官でした。神さまは聖なる方ですから、たしかにそういう面はあります。しかしそれは、神さまのほんの一部でしかありません。そのことに長いこと気がついていませんでした。神さまは私にとって、「献げよ」と迫るお方でした。奪っていく神さまでした。ですから苦しい信仰生活でした。

もちろん、職業や家庭形成について、献げてみてわかったことはありました。正直、苦しみながらも手放してみなければわからなかったことばかりです。もしそれがなければ、おそらく自分は牧師として説教ができなかっただろうと思います。でも、偉そうなことは言えません。なぜあるとき委ねたかも自分でわからないくらい、振り返れば危ない橋ばかりです。信仰的な見識などまったくありませんでした。まさに「首の皮一枚人生」です。

このように委ねることに意味があるのですが、神さまをどのようにとらえているかは少し違う事柄のような気がします。神さまを裁判官としてしか受け取れなければ、いつも責められている感じになり、足りない自分を責めてしまいます。しかし、自分に行き詰まって、改めて聖書を読んでみると、驚きました。「聖書には、広い恵みの世界が描かれている。聖なる基準に達していないことを指摘する裁判官の神さまではなく、祝福したくて待ってられる父・牧者としての神さまが描かれている」ということが。

旧約聖書はどのようなのですか、という質問が必ず出ます。たしかに厳しい神さまが描かれています。これは大きなテーマなので、ここで簡単に説明することはできませんが、一つ心に留めておきたいことは、旧約聖書と新約聖書とは、書かれているスタンスがまったく違うということです。旧約聖書は基本的に民族史です。民族を守るために神さまがどのようなことをしてくださったのか、この視点で読む必要があります。この視点で読むと、旧約聖書に書かれている神さまも、実は愛とあわれみにあふれた方であることが伝わってきます。

神さまが受容的な父・牧者であるということと関連して、「ありのままがいい」という言い方がなされます。その言い方を積極的に使う人も、そのような言い方には批判的な人も、その意味をバランス良くとらえておく必要があると思います。

神さまが受容的な父・牧者であるというのは、神の国に組み込まれているモラルをそっちのわけで、「全部、いいよ、いいよ」と言っているということではありません。神さまの聖の基準は一ミリも下がっていません。この基準にこだわらないで、人間の現実に照準を合わせるのは、人文科学でありヒューマニズムです。福音はこの点について一歩も譲りません。しかし、譲らない高い基準があるからこそ、人間が罪深いことがわかる、イエスさまの十字架が必要であることがわかる、自分にはできないから、やっていただく以外にないことがわかる、まさに恵みの原則です。

「ありのままがいい」というのは、神さまがやってくださるから、今の自分の状態を否定せず、むしろ受け入れながら、あとはやってくださる神さまに委ねてゆけばよいという聖書のメッセージです。聖書には父・牧者の神が啓示されているということを心に留めて、聖書を読んでいきたいと思えます。ただしここで言われている「父」は、父性だけでなく母性も含まれる、理想的な親のイメージでとらえると、その意味がよくわかります。

立ち位置の原則——自分をどこに重ねるか

聖書を読むとき、どの場面にも感情移入ができるわけではありません。しかし、自分を重ねることができるような場面や記事に出合ったら、自分を具体的にどこに重ねて読んでいるかをチェックしてみます。これを間違えると、かなり違う結論になってしまいます。

たとえば、ルカの福音書一五章の放蕩息子の記事は、兄に自分を重ねると、その意味がよくわかります。ここは、イエスさまがパリサイ人・律法学者に向けて語られたたとえ話です(二節)。ですから、主人公は身を持ち崩した弟ではなく、品行方正な兄です。こだわって言えば、このたとえ話のタイトルは「放蕩息子」ではなく、「真面目ふてくされ息子」です。もちろん、弟に自分を重ねることで教えられることもたくさんあります。自分を兄に重ねても、弟に重ねても、まさに自分の姿そのものだと思います。

ぶどう園の記事は、五時の人に自分を重ねると、スッキリ読めます。最後まで「お座敷」がかからなくて夕方までポーツと広場にたたずんでいた人が、ふとしたことから想定外の恵みを受けるといのがこのたとえ話のメッセージです。

種蒔きのたとえはどうでしょうか。聖書をよく見ると、正確には「種蒔く人のたとえ」です。そう

だとすると、種蒔く人に自分を重ねて読むと、イエスさまが言おうとされたことがわかりやすいでしょう。

イスカリオテ・ユダは、自分が生きる福音とは何かを考えるとときに問題になる人物です。私たちはあまり読まないのですが、ユダ研究はいろいろな人たちによってなされてきました。受難週の記事を読むとき、私たちは自分をだれに重ねるでしょうか。イエスさまを裏切った情けないペテロに自分を重ねるかもしれませんが、しかし、自分はユダのようではないというスタンスよりも、思い切ってユダに重ねるほうが、福音のすばらしさを理解しやすくなります。それ以外の人物に自分を重ねて読むと、福音の意味がばやけてきます。なぜかという点、もしもペテロに重ねて受難週を理解すると、暗黙の前提としてユダを非難する可能性が出てくるからです。そして、ユダを非難するその心がイエスさまを十字架につけていることに気づかないのです。

なぜペテロは救われ、ユダは悲惨な結果をたどったのか。「それは、自死したからだよ」と突き放すこともできます。しかし、ここには私たちが気づいていない、また気づきたくない前提があります。「自分は大丈夫だ」と思いたいという意識です。実際にユダに関する聖書の記述を追っていくと、時間が経つにつれて、初代教会のなかでユダが悪者にされていたことが浮き彫りにされます。

四福音書の執筆年代は三つあります。最初に書かれたのがマルコ、そしてマタイとルカが次の時代に書かれ、第四福音書であるヨハネの福音書はさらに時代が下がって書かれました。まず、ベタニヤでの香油の場面です。マルコの福音書一四章三―九節を見ると、香油を注いだのは「ひとりの女」

憤慨したのは「何人かの者」です。マタイの福音書二六章六―一三節を見ると、香油を注いだのは「ひとりの女」、憤慨したのは「弟子たち」です。そしてヨハネの福音書二二章一―八節を見ると、香油を注いだのは「ベタニヤのマリア」、憤慨したのは「イスカリオテ・ユダ」で、ヨハネは、どちらの名前もばらしています。裏切りを予告する場面では、イエスさまが裏切りを言われたとき、マルコの福音書一四章一八―一九節では、「まさか私ではないでしょう」とかわるがわるイエスに言った」と書かれてあり、十二弟子のだれもが、自分が裏切るかもしれないということを感じていた可能性を記録しています。ところがマタイは二六章二五節では、ユダが「まさか私のことではないでしょう」と尋ねたとき、イエスさまが「そうだ」と答えられたことを記録しています。さらにヨハネの福音書に書かれている弟子選出の場面では、六章七〇節に「ひとりには悪魔です」ということばを記録し、ユダを、イエスを「神の聖者」と告白する者から排除しています。聖書は人間の姿をそのまま書いています。それが人間なのです。私たちもそうなのです。

ユダがだんだん悪者にされていったプロセスの背後には、自分は大丈夫だと思いたい人間の心理が隠れています。クリスチャンであっても、自分は大丈夫だと思いたい、……そうすると悪者が必要になります。「あっ……、いたいた、そうだ。あのイエスさまを裏切った男、ユダを悪者にすればいい」という意識が（もしかしたら無意識かもしれませんが）人間には働くのです。

そう考えるとスキツと読めます。ヨハネの福音書の二二章がなぜ挿入されたのか。それは、ペテロとヨハネを擁護するためです。それにはコインの裏があります。「悪者はユダだ。」これが本当に初

代教会の風潮だったら悲しいことですが、でも聖書は正直だなど思います。受難週のところは自分をユダに重ねて読むと、イエスさまの十字架と恵みがどれだけありがたいかが身に染みてわかります。

初代教会に話を進めます。神さまの働きが進んだ一方で、ルカはアナニヤとサツピラの出来事を正直に記録に残しています。私たちはその記事を読むと、怖い気持ちになります。「もしかしたら、自分もさばかれるかもしれない。」アナニヤとサツピラを批判する立ち位置に自分を置くのはあまり良くありません。そのことはさておいて、「もし自分がこの二人のようになったら、自分もあつというまに打たれてしまうのか」と考えると、少し心配になります。なにせ心を見ておられる神さま相手ですから。しかし、だからこそ恵みなのです。

ここは、本当はあまり直視したくないアナニヤとサツピラに思い切って自分を重ねて読んでみると、違う風景が広がります。逆に、自分はアナニヤやサツピラとは違うと思っている限り、私たちは二人を暗黙のうちに批判しているでしょうし、自分も打たれるかもしれないという心理的不安も消えないでしょう。しかし、自分を身の丈以上に持ち上げたいという心理的外圧を自分に課すことをやめると、少し風景が変わります。見えない所を見ておられる神さまの前に、自分はこの二人と変わらないと思えると、自分も恵みをいただいているからこそ生きられることがわかります。本当にありがたいことです。

このように、聖書は恵みの原則で書かれているので、勝ち組目線で読んでもまったく意味がわかりません。むしろ、弱い立場、罪ある者の立場に自分を重ねるとき、そこに書かれている意味がよく理解できます。

人間観察の感性——人間っておもしろい

恵みの原則に立つと、人間観察がおもしろくなってきました。人間の現実には迫る見方が自由にできます。なにせ人間の側の立派さが神さまの恵みをいただくための要件ではないので、何も格好つける必要がありません。ありのままの自分で良いわけです。そういう目線で見直してみると、「事実の小説よりも奇なり」ということばのように、次から次へと人間のおもしろさが見えてきます。家族の力動などは現代と同じです。聖書は、人間の現実を問引きすることなく、赤裸々に描き出しています。そういう意味で、現代でも活かせるヒントにあふれています。たとえば、このようなことを手がかりに聖書を読みます。

人間心理を探る——人間の心の鼓動に敏感に

人間性を探る——人間の発達に敏感に

人間関係を探る——人間同士の化学変化に敏感に

人間心理を探る——人間の心の鼓動に敏感に

まず、人間の心の鼓動を探る視点についてです。人物が出てきたら、自分をその人物に重ね合わせ、その人がどういう気持ちだったかを考えます。たとえば、パウロが「迫害」ということばを使うとき、どういう意味で使っているのかを考えます。これはいくらギリシャ語の意味を探ってもわかりません。もちろんイメージをふくらませるのですから、推測も含まれます。ですから、みことばの真理として断定しにくいこともあります。説教など、公の場で語る場合は、ワンクッションおいて、こういう語りかけもあるのではないかとという問題提起にとどめます。

パウロがこのことばを用いるときには、自分が過去に教会を迫害していたという思い、慚愧の念、罪責感、苦悩、トラウマなどがあるはずです。

使徒の働き一章で、ペテロは手を挙げて、欠員補充の提案をします。なぜペテロは手を挙げたのだろう。イエスさまを裏切ったのですから、いまさら偉そうに何かを言えるはずありません。この場面ではペテロがどういう気持ちだったかは興味深いところです。自分は裏切り者だという苦悩を癒したい一心で手を挙げたとすれば、そのプロセスが彼の癒しになったかもしれない。ユダの空席を見れば、自分が犯した罪を思い出すわけですから、穴があいてしまったものを埋めたいという心理が働いた可能性は十分あります。いろいろ思い巡らすと興味深い示唆が与えられます。

人間性を探る——人間の発達に敏感に

創世記に登場するヨセフが兄たちから嫌われたのはなぜだったのか。自分が見た夢を平気で兄たちに語る姿は、未熟といわざるを得ません。自分だけ父親から特別扱いを受けて育ったことを考慮すれば、なるほど彼の言動も理解できます。その後ヨセフは、数奇な人生をたどります。ヨセフの人生を追いながら、その人間性を追っていくと興味が湧いてきます。成長の足跡をたどることができます。

新約聖書に目を向けます。ルカの福音書二章には、イエスさまが十二歳のときの出来事が書かれています。まず考えます。「なぜルカは、イエスさまのこの出来事を記録に残したのだろう。」このことだけでも興味は尽きません。

かなり広いところまで視野を拡大することになりますが、ルカの福音書と使徒の働きをまとめてルカ文書と呼びます。これらはパウロを養護するためにルカが記録した節があります。もしそうだとすると、ルカはなぜイエスさまの少年時代を記録に入れなくなったのか。答えは出ないのですが、思い巡らしを豊かにしてくれます。

イエスさまは人間として成長されました。私たちと同じでした。人間として成長するというのは、私たちが感じるような青年期の葛藤、親から理解されない寂しさや苦悩をイエスさまも体験されたということです。

創世記は人間関係の宝庫です。どれも、よくぞここまでと思うくらい、「問題あり家族」です。アブラハムは、なぜハガルを一晚で追い出してしまったのか。イサクはどうしてエサウだけを可愛がったのか。リベカはどうしてヤコブだけを愛したのか。えこひいきをされてさんざん苦しんだはずのヤコブは、なぜ自分の子どものことになるかと、ヨセフとベニヤミンだけ可愛がることをやめられなかったのか。どれもこれも、そのまま現代に持ってきて色あせない迫力があります。

ペテロはなぜ啖呵たんかを切るのか。端から見れば、「よせばいいのに」と思います。そのすぐ横には、「やるぞ、やるぞ、……ほれ、やった」みたいな、さめざめと眺めていたヨハネがいます。ペテロはたしかに「憎めないヤツ」ですが、その言動はどうもそれだけでは説明がつきません。人間の言動には必ず関係性の中の化学変化があります。ギリシャ思想を知っている、内向的・思索的なヨハネが近くにいたから、ペテロも負けじと頑張ったのかもしれない。これも人間関係の現実です。

このような視点を手がかりに人物を読んでいくと、聖書からの語りかけはさらに豊かなものになっていく可能性があります。そのためには、読む者の信仰と人間性の深まりが欠かせないということなのでしょう。

ユーモアの感性——ほほ笑んで聖書を感じる

この原則は、福音書に記されたイエスさまに限定されるかもしれませんが。イエスさまはユーモア豊かな方だと思えます。私たちがイエスさまのユーモアにお付き合いできないと、イエスさまがおっしゃりたいことは理解しにくくなります。

たとえばイエスさまは、弟子たちに「あなたがたを、人を漁る漁師にします」（マタイ四・一九）と言われました。なぜこのような言い方をされたのか。これは、イエスさま独特の、一級品のユーモアです。牧師が人のたましいを一本釣りするという意味ではありません。そもそも、福音をお伝えしたい相手の方を魚にたとえること自体失礼です。

イエスさまが漁師ということばが使われたのは、それを聞いている相手が漁師だったからです。イエスさまがこれをおっしゃっているときの微笑みが目に浮かびます。愛情を込めて、ユーモアを交えて、このような表現が使われたのでしょうか。

イエスさまは、説教されるときもユーモアが豊かです。マタイの福音書六章三四節には「あすのため心配は無用です」と書かれています。これは、クリスチャンはあすのことを心配してはならないということではありません。これを字義どおりに受け取れば、クリスチャンは保険に入らないことに

なりますが、そういうことではありません。イエスさまはおそらくユーモアを込めて、微笑みながらこのみことばを言われたのではないかと思えます。

それに続く七章一節も、実はかなり誤解されてきたみことばです。「さばいてはいけません。」イエスさまは人間には不可能であることをご存じで、「人間にはね、本当はできないんだよ」と、温かい目線で、包むように言われたのではないかと想像します。このみことばは本書第七章で詳しく学びます。

ユーモアは人間の成熟と関係があると言われます。自分が追い詰められたときにそれが一番よく表現されます。未熟な人は、チクツとひと言、皮肉で返します。聞いた人が笑えないブラック・ユーモアは、それを言った自分が人間として未熟であることを言いふらしているようなものです。他方、成熟した人はユーモアで返します。イエスさまのユーモアを豊かに感じるができるために、ユーモアの感性を持ちたいと思います。

非連続性の原則——人間の行き詰まりの向こう側に

恵みの原則に立つと、聖書の風景が少し変わって見えてきます。私が子どものころは、『巨人の星』の星飛雄馬が爆発的人気を誇っていました。「思い込んだら試練の道を行くが男のど根性」とい

うフレーズを思い出します。しかし、聖書の世界をこのようなイメージで描くとしたら残念です。イエスさまが描こうとされた神の国は、このような風景ではなかったはずで、そうでないとしたら、どういふ風景でしょうか。

それは、やっていただく意識が深まっていく世界です。自分の人生、結局やっておられるのはイエスさまだと思える世界です。どうしたらその世界に行けるのか、その道筋を示しているのが聖書です。ところがその道筋は、私たちが一般的に思索とか哲学とか宗教とかで考えるものとはまったく違々と聖書は語ります。

人間の考える道筋はこうです。「聖書を読んで、自分も多少は真面目になって、神さまに近づこう。クリスチャンになったら、より一層頑張ろう。」つまり、自分が考えている延長線上に神さまのすばらしい世界があるという発想です。これは連続性の考え方です。人間がすることと神さまのみわざが同じ線上にあります。

ところが聖書が示す道はまったく逆です。人間が頑張って何かをやっていく延長線上に神さまの恵みがあるのではないのです。人間が自分にはできないことがわかったとき、突然、まったく違う世界が開ける、これが神の国だと聖書は語ります。つまり、人間が描く世界と神さまの世界との間には、連続性がないのです。非連続性の、向こうからやってくる世界です。

クリスチャンは恵みの手段を大切にします。聖書を読むこと、祈ること、教会の集会に出席すること、この三つを基本的なこととして奨励しています。「聖書を読みましょう」と励まされてきたから

こそ、ここまで守られてきた面も実際あります。本当にありがたいことです。

ところが、恵みの手段を忠実に行って、その延長線上に神さまの恵みがあるかというところ、そうではありません。誤解しないでください。恵みの手段に意味がないと申し上げているのではありません。

恵みの手段を忠実に守っていればすばらしい世界が開ける、と考えるのには限界があります。なぜなら、福音は神さまがしてくださることに重点が置かれているからです。むしろ、忠実に守ることの中に、律法学者やパリサイ人のようになってしまいう落としか穴が隠されています。その律法主義の恐ろしさをパウロは身に染みて経験しました。真面目になればなるほどはまり込んでしまうのです。

「この丘を登っていったら恵みの高嶺に到達するぞ」と頑張ってやっても、おかしなことになどどこかで行き詰まります。行き詰まるのは、家庭の問題であったり、夫婦の問題であったりします。自分のアイデンティティーに関わる問題が揺らぐという経験をします。そして、はたと気づきます。

「自分が頑張ってやっていくその先に、もしかして神さまの恵みはないかもしれない。」

そこで、非連続性の世界が始まります。「ああ、自分はこんなに頑張ってきたけれども、人間の幸せは自分の頑張りに根拠があるのではない。結局神さまがやってくださるから大丈夫なんだ」と思える、ホッとする世界です。「この丘を登って行ったら……」という人生観は人の上を目指すので、心のどこかで、できない人を見下げていることは避けられません。そこに、「神さまがやってくださるから……」という要素が入ることで、いつも人を下に見ていたいという心理的緊張感に縛られ続ける必要もなくなつてホッとできるのです。

このように考えていくと、聖書に描かれている世界、神さまの支配しておられる世界は、一つのシンプルな原則で動いていることが見えてきます。「人間がダメだと思えるとき、神さまによる非連続性の世界が開ける」という原則です。これが、聖書が「真面目だけではダメだ」と宣言する理由です。その極めつけはイエスさまの十字架です。徹底した敗北の先によみがえりの恵みの世界が広がっているという非連続性のメッセージです。

非連続性の世界、すなわち、「人間の行き詰まり↓神さまによる思いもよらない展開」のパターンを見つけるといって聖書を読んでもみると、なるほどどうなすけずけず。

第5章 このみことばってこんな意味なの？

84

第二章から第四章では、聖書がどういう本か、聖書はどのような視点で読めばよいかを考えてきました。これらのことをふまえて、聖書を読むときに、実際にどのような手順が必要になるかということに話を進めていきます。

ひと言で言うと、文脈を大切にして聖書を読むということです。この考え方が土台になっているのが帰納的聖書読解法ですが、帰納的聖書読解法の具体的な内容については割愛します。興味がある方のために、簡単なフォーマットを（巻末資料）として載せておきました。もう少し詳しく学びたい方は、イムマヌエル綜合伝道団・教会学校部から出されているエバタシリーズ2「開け！みことばへの耳もつと教師が生かされるために」もあわせてお読みください。

専門的に学びたい方のために、もともとの読解法をご紹介します。これは、ロバート・トレイナー (Robert Traina) という先生が提唱されたもので、*Methodical Bible Study* という本に記されています。

もう二十年以上前になりますが、アメリカのアズベリー・セオロジカル・セミナリーで学んだときに、この読解法のクラスを取りました。当時アメリカの教会では、一つのみことばが文脈と本来の意味から離れて語られている状況にありました。アズベリーはそのことに危機感を抱き、文脈を考慮した読み方を学生に教えることに使命感を持っていました。残念ながら先生はその時すでに退任されたので、いくつかクラスを取りました。観察ノートを作る課題は本当に大変でした。しかし苦しみなながらも学ぶうちに、いろいろなことに目が開かれました。自分がいかに間違っって聖書を解釈していたかもわかりました。新しいことに気づく経験はエキサイティングでもありました。

今は神学校でのご奉仕が与えられ、この読解法を用いてクラスを担当しています。厳密にオリジナルの方法を踏襲しているわけではなく、自分なりにかなりの修正を加えたので、「修正3D聖書読解法」と言ったほうがよいかもしれません。トレイナー先生がご覧になったら、「それはまずい。そういうことではないんだよな」などなど、いろいろクレームをいただきそうですが、アズベリーで教えておられた先生方も、それぞれかなり個性がありました。

みことばの意味の決まり方

さて、この読解法を用いて、一つの節のみことばの意味がどのように決まるかを考えてみます。まず大切なことを確認します。それは、「文章の意味は文脈で決まる」という大原則です。そのたながめても、原語の意味を調べても、その節が語ろうとしていることはわかりません。逆に、誤解して意味をとらえてしまう危険すらあります。文脈で読む大切さについては、第一章「聖書を読む」の「文脈読み」の項目をもう一度ご覧ください。

文脈を大切にするためには、だれが書いたのか、だれに書いたのか、どういう状況にあったのか、どういう文化背景があったのかを考えながら読んでいきます。また、頭を使いますので、実際はしんどいのですが、前後の流れ、そのみことばがその書の流れの中で、どのような位置で言われているか、こういったことにも心を留めます。

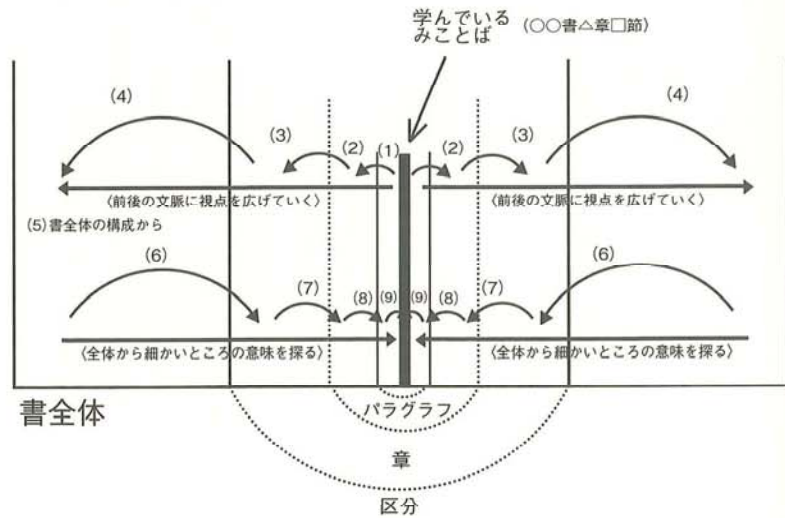
実際にはこのように目線を送ります。図12をご覧ください。

そのみことば↓パラグラフ↓章↓区分↓書全体

書全体↓区分↓章↓パラグラフ↓そのみことば

書全体まで視野を広げることにはなかなかできませんが、せめてパラグラフの内容、あるいは章の内容、そのみことばが含まれている区分の内容くらいまで確認できれば、とりあえず大丈夫です。前後二―三章くらいまで斜め読みができればさらに良いと思います。

一つのみことばの意味はこのようにして決まっています。もちろんファイナル・アンサーである必要はありません。自分なりの納得をもって、このみことばは、この流れの中でこういう意味で語られているとい



文脈の中でみことばの意味が決まるプロセス
 第一ステップ (1)から (4)へ視点を広げて全体の内容を理解する
 (5)全体の構成が見えたら
 第二ステップ (6)から (9)への動きの中でみことばの意味を理解する

図12 文脈でみことばの意味が決まるプロセス

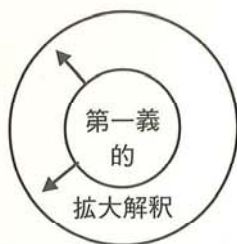


図13 第一義的解釈と拡大解釈

この問題を整理するために、第一義的解釈と拡大解釈という二つのカテゴリーで考えるとよいと思います。図13をご覧ください。第一義的解釈とは、本書が焦点を当てているような、背景と文脈を考へながらみことばの意味を探る解釈です。拡大解釈とは、文脈を少し離れて、自分の信仰にとってどのような意味があるかという視点で適応してゆく解釈です。

文脈で聖書を読むことが大切だからといって、拡大解釈は一切認めないということではありません。現代に生きる私たちが、多少文脈を離れてでもみことばから励ましを受けることは十分にあります。場合によっては、聖霊が文脈を乗り越えて豊かに語られることもあるでしょう。ですから私たちの心は、いつも聖霊の働きに対してオープンであるべきです。

第一義的な意味と、それまでに自分が考えていた意味が同じ方向性を持った思想であれば、それほど大きな危険はないと思います。しかし、あまりに違う内容になってしまう場合には、少なくともその解釈で説教や、お話をすることは避けるべきでしょう。

みことばのもともとの意味を探る誠実さは、神さまが伝えようとしたメッセージを受け取る時に欠かすことができない真摯な姿勢です。第一義的解釈をしたうえで拡大解釈をするという謙虚さがあれば、大きな怪我はしません。しかし、第一義的解釈なしに拡大解釈だけで講壇のご奉仕をすると、根拠のない、ツッコミどころ満載の解き明か

うことを確認してください。

この読解法では、最初からファイナル・アンサーありきで聖書を読まないのが、当然のことながら人によって何となく結論が違うことがあります。自分の読み方と他の人の読み方が違っていた場合は、なぜ違うのだろうか、どういう視点で読むのだろうか、自分と他の人の結論を付き合わせながら、さらに考えていきます。自分の見方がこの点で間違っていたと思えば、そこで修正すればよいわけですし、比べてみて、やはり自分の読み方のほうが分があるなどと思えば、それをわかってもらうように丁寧に説明すればよいわけです。

第一義的解釈と拡大解釈

さて、今までに自分なりに理解していたみことばの意味を脇に置いて、改めて文脈を考慮してみようと向き合うと、かなり違うメッセージが語られていることに気づくことがあります。それでは、これまでのみことばの解釈は間違いだから、切り捨ててしまえばよいかというと、そういうことでもありません。また、自分の信仰体験にとって重要であるみことばが、文脈から判断すると少し意味が違うかなと感じる場合もあります。しかし、文脈から見た意味が違っていたからといって、そのみことばが自分の信仰にとって意味がなかったと考える必要はありません。心配しないでください。

しになってしまいます。質問を受けたときに説明ができません。できれば避けたいものです。

みことばの意味再考

さてここでは、文脈から一つのみことばの意味を探ってみた实例を、比較的なじみのある新約聖書からいくつかご紹介します。ファイナル・アンサーではなく、限られた心と頭で意味を探った一つの取り組みです。もし可能であれば、聖書を開きながら考えてみてください。

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

マタイの福音書一章二八節

マタイの福音書一章二八節は、「罪の重荷を下ろす」という意味で語られることがあります。イエスさまを信じたときに、神さまからの約束のみことばとして受け取っておられる方も少なくないと思います。ところが前後の文脈を見ると、このみことばは、弟子たちに対して語られたものであることがわかります。そうすると、ここで言われている「重荷」は、「罪の重荷」というよりはむしろ

「奉仕の重荷」と理解したほうが良さそうです。もしそうだとすると、奉仕で疲れたらイエスさまのもとに行けばよいという意味になります。もし罪の重荷だとしたら、イエスさまの十字架のもとに下ろすことができるはずですが、下ろしてもかまわないと言われていないのはおかしい話です。

このように考えると、このみことばは、奉仕で疲れを覚えたとき、イエスさまのもとに行けば、そこに安らぎがあるという意味になります。奉仕の重荷は下ろしてもよいとは言われていません。重荷を下ろすことができなくても、イエスさまが同じ「くびき」を負ってくださいから大丈夫だということです。そして、そのような意味で重荷を担うとき、イエスさまの心優しさと謙遜さが身に染みてわかります。重荷を軽いと感じる、イエスさまが共にいてくださることが体験的にわかるといえます。

まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。

マタイの福音書一八章一九―二〇節

このみことばは、しばしば心を合わせて祈るときにイエスさまがいつしよにいてくださるという意味で語られ、私たちはこのみことばによって多くの励ましを受けました。しかしこの部分は、一

度文脈をよく見てみる必要があります。兄弟が罪を犯したときにどのような対応が必要かということが書かれている部分です。少し流れを追っていきましょう。

イエスさまの方法は明快でした。「兄弟を得る」(二五節)のために、三つの段階が必要だということです。

第一の段階は、一対一でお話することです(一五節)。「ふたりだけのところで」と書かれています。二人だけでやってみて、それでもダメな場合、初めて他の人にその情報を話してもよいというのがイエスさまのスタンスです。それまでは、情報は当事者のみに限定されなければなりません。このような守秘義務の考え方を私たちも身につける必要があります。それで第二の段階にいきま

す。第二の段階は、ほかに一人か二人を連れて行って、三〜四人でお話することです(一六節)。それでもダメな場合、初めてそれは公にされます。第三の段階です。

第三の段階は、教会に告げることです(一七節)。兄弟が罪を犯したことを知ってしまったとき、私たちはどうするでしょうか。「あのね。ここだけの話よ」といって、当事者以外の人に情報が伝えられ、いきなり第三段階に飛んでしまいます。話に尾ひれがついて、実際とまったく違う話になって拡散してしまうこともあります。当事者も傷つきましますし、場合によってはその人の回復の機会は永遠に失われてしまうかもしれません。これは「兄弟を得る」というイエスさまの目的を著しく損なうこととなります。恐ろしいことです。

傷つくのは当事者だけではありません。知らなくてもよい話を聞いてしまった人も、実は心に傷を負い、さらには余計な偏見をもって当事者を見ないように葛藤しなければならなくなってしまうのです。黙っているためにもエネルギーを使わなければなりません。

どのような場合であっても絶対に他人に話してはいけないと紋切り型に禁止しているわけではありませんが、「ここだけの話よ」といいうい方には慎重であるべきです。少なくとも動機が「兄弟を得る」ためであることははっきりしていなければなりませんし、興味本位でうわさが回することはキリストのからだである教会を破壊する行為であり、NGです。

この三つの段階を説明したうえで、二〇節が語られています。「ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです」というみことばは、罪を犯した兄弟に対して、イエスさまのスピリットをもって罪を指摘することができれば、その場面にイエスさまが共にいてくださるという意味です。二〇節のみことばは、響きは決して悪くありませんが、お祝いの人に送らないほうがよさそうです。

私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みとともに受ける者となるためなのです。

コリント人への手紙第一、九章二三節

「すべてのことを、福音のためにしています」の意味は、その前の文脈を読まないとはほとんど理解できません。本来、八章一節から読み始めなければいけない部分で、テーマは偶像に献げた肉です。偶像に献げた肉は食べてもよいかという議論がされています。

このことを理解するために、もう一度、第二章「そもそも聖書って何？」の意味・形態論を思い出してください。ものごとには必ず「意味」と「形態」があります。この場合、偶像に献げた肉そのものは、偶像を崇拜するという「意味」がそこになければ、クリスチャンにとってはただの「形態」にすぎません。信仰は「形態」より「意味」が重要だということであれば、別に偶像に献げた肉を食べてもよいではないかという結論になります。

信仰は「意味」のレベルの問題です。自分にとっての「意味」がしっかりしていれば、「形態」にはそれほどこだわる必要はない、そしてそれをパウロはさらに積極的に理解します。自分にとって、クリストにあつて生きるという「意味」ははっきりしていて揺るがない、だからこそ、自分へのこだわりを捨てて、「だれに対しても自由になれる」(一九節)し、「より多くの人を獲得するため」であれば、どのようなタイプの人の「形態」にも自由に合わせることができるといことです。律法の下にある人には律法の下にある人のように、律法の下にない人には律法の下にない人のようになれる、それがパウロにとつての自由なのです。

ですから、二三節の「すべてのことを福音のために」というのは、朝から晩まで、すべてを福音のためにしているという意識をもって過ごさなさいという意味ではありません。根性論でもありません。

少し広く文脈を見なければならぬ箇所ですから、難しかったかもしれませんが、とても大切な、意味を正しく取っておかなければならない部分です。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。

コリント人への手紙第一、一〇章一三節

ここでは、試練ということばが鍵になっています。八章一節以下の偶像に献げた肉の問題が論じられている文脈の最後の部分になります。

偶像に献げた肉は、クリスチャンにとつては本質的な意味を持たないので、それほど怖がる必要はないというのがパウロの基本的な論調です。しかし、一〇章一一〇節でイスラエルの民の例を取り上げ、怖がる必要はないからといって不用心に肉に手を出せば、場合によっては偶像崇拜になってしまうから気をつけなければいけないとも述べています。

たしかに荒野を旅するのは熾烈です。過酷な毎日を過ごしていれば、人間は弱いもので、誘惑に負けて、つい罪に陥ることがあります。その流れの中での二三節です。

このように考えていくと、ここで言われている「試練」には「誘惑」の意味が含まれていると取る

ほうが自然です。

自分には何の問題もないのに引き受けざるを得なかった試練であれば、神さまの脱出の道待ち望むだけでよいかもしれません。しかし、試練は誘惑であり、人間を罪に引きずり込む力を持っているから警戒が必要だということも、パウロは言いたかったのかもしれない。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

ガラテヤ人への手紙二章二〇節

ガラテヤ人への手紙二章二〇節は、一一節以下の文脈を読んで理解する必要があります。一一節には「ケパ」という名前が登場しますが、これはペテロのことです。そのペテロがイエスさまの福音にあずかり、神さまの恵みを受けるためにはヘブル人としての儀礼などは必要ないことを知ったはずなのに、いつのまにか割礼派の人たちに気を遣って元の考え方に戻っていつていることをパウロは指摘しました。パウロが言いたかったことは、神さまの恵みと救いはただ信仰によっていただくことができるといことです。そして、その根拠が、イエスさまが十字架にかかってくださったことにあると言いたいのです。パウロにとっては、自分はイエスさまと共にあのゴルゴタで十字架にかかっている

はずだから、そのことを信じることで十分だ、ということなのです。

そもそもこの文脈の「私」が何を意味しているのかという点はとても微妙であり、意味を丁寧に決めていかないと聖書全体のスタンスと合わない解釈になります。「己の死」という神学用語は、おそらくこのみことばが一つの根拠になっていると思えますが、己が死ぬといっても、自分が人間としての機能を放棄してしまうわけではありません。自分の主張をしてはいけないという意味でもありません。ましてや、人に服従しなさいという意味でもありません。実際、自分を押し殺すというニュアンスで受け取られることが多いと思いますが、この方向で考えていくと、キリスト教は禁欲宗教になります。禁欲主義は、聖書が語る福音ではありません。

それでは、自分が死ぬとはどういう意味なのでしょう。それは、自分という存在は信仰的な意味で、イエスさまといっしょにすでに十字架の上にあるという信仰のことです。全部が赦され、新しいのちに生かされているのがこの「私」だという意味です。

いくつか実例を取り上げました。文脈から意味を確認してみる必要があるみことばはこれ以外にもありそうです。前後に注意しながら読んでみると、新しい「気づき」が与えられます。ご自分で聖書を読まれるとき、心に留まったみことばがあったら、少し視野を広げて、文脈からそのみことばの意味を確認してみてください。さらに恵みが豊かになることがあります。

第6章 書全体の構成からメッセージが見えてくる

98

第五章では、一つひとつのみことばの意味がどのようにして決まるのかということを考えました。この章では、書全体に視野を広げます。少し難易度が上がったとお感じになるかもしれませんが、ゆつくり、もし可能であれば聖書を開きながら考えてみてください。

書全体を見ると、一つのみことばの意味を探るのとはまた違う、とてもエキサイティングなみことばの学びができます。聖書の記者は、一つひとつのみことばでも何かを伝えようとしたはずですが、その前提としてその書全体で何かを伝えたかったはずで、ですから、書全体に視野を広げる視点は、みことばのメッセージを汲み取ろうとするときに欠かすことができません。

ここでは、旧約聖書と新約聖書から例を挙げて、書全体の構成から見えてくるメッセージについて考えます。チャートを使いながら説明していきます。ここで提示するチャートはいわゆる正解ではなく、一つの例にすぎません。もっと違う読み方もあるかもしれません。聖書と比べてみて、自分だっ

たら違うところで区切るかなと思うことがあるかもしれませんが、その場合はいろいろご自分の中で対話してみてください。

創世記——ユダを記したかった？

最初に創世記です。図14(次頁)をご覧ください。創世記は、「歴史」(二・四、五・一、六・九、一〇・一、一一・一〇、一一・二七、二五・一二、二五・一九、三六・一、三七・二)というキーワードでまとめることができる部分で構成されています。ただし二章四節だけは、同じヘブル語の「トーレドート」でありながら、「経緯」(新改訳)という日本語があてられています。

さてここで、その「歴史」ごとに何が書かれているかを観察すると、おもしろいことが見えてきます。たとえば、テラ家の「歴史」(一一・二七以下)ですが、内容はテラではなくアブラハムです。イサク家の「歴史」の内容はヤコブです。ヤコブ家の「歴史」の内容はヨセフとユダです。このように「歴史」は一世代ずれて書かれています。なぜなのだろうと考えたくなります。もちろん理由は推測するしかありませんが、世代を意識して書かれていることは何となくわかります。

それから、創世記には兄弟が並んで出てきます。カインとアベル、ノアの息子、イシュマエルとイサク、エサウとヤコブ、それにヨセフの兄弟です。そして多くの場合、長子の権利が重視された時代

99

創世記
信仰の家族の歴史～兄弟関係の視点から

I 創造論 宇宙の起源		II 創造論 人類の起源			III 契約論 ヘブル人の起源					
天地創造 1:1~	天地 24~	アダム 5:1~	ア 6:9~	アアの 息子 10:1~	セム 11:10~	ナラ 205歳 (11:32)	イシュ マエル 25:12~25:19~	イサク 28:9	エサウ 36	ヤコブ 37:2~
930歳 (5:5)	アダムとエバ	950歳 (9:29)	アアと家族	11:27~	175歳 (25:7)	アブラハムとサラ	イサクとリベカ 180歳 (35:28)	ヤコブとラケル 147歳 (47:28)	エサウ 36	110歳 (50:26)
1~2:3	2:4	6:8	6:9	11:26	11:27	25:11	25:12	27:1	35:29	36
「よかつた」1:31		一般的 (人:何世代、場所:世界、時間:何千年?)			特定の (人:数々の族長、場所:カナン、時間:数世代)					
旧約		新約			新約					
人間の罪		解決			旧約—ヘブル人を通じてみこころが示され					
					新約—イエス・キリストによって					
					38章 ユダ家の現実					
					実は「ユダ(健の人物)」ヨセフ 50:26					

聖なる歴史
「ヨセフ」

図14 創世記の全体図

に、長男ではないだれかが神さまの祝福を受けています。これもなぜなのかを考えなければなりません。

一つのメッセージとして、これが神の国を象徴的に表しているのではないかとということです。ふさわしくないものがあるまま受ける恵みの原則が貫かれているように見えます。その典型はヤコブです。人から奪うことを平気とするヤコブがなぜ神さまの祝福を受けるのか、普通の発想では考えにくいことです。ヤコブの側には、祝福を受ける理由がありませんでした。

人情からすると、ヤコブが祝福を受けた理由を探したくなります。ヤコブはたしかに人のものを奪ったけれども、それだけ霊的に真剣だったという解釈もあります。しかし、聖書全体が語る恵みの原則からすれば、理由がないヤコブが祝福を受けるのが神の国なのです。ヤコブの側には理由がないのです。

「そうすると、エサウはどうなるのか」という質問は出ると思います。たしかにエサウにはいろいろと問題がありました。それでも創世記の記者は、エサウとヤコブがイサクを葬ったことを記録に残し(三五・二九)、その後、エドムの「歴史」をきちんと入れてあります(三六・一以下)。神さまはエサウを決して見捨てず、エサウにふさわしい十分な祝福をもって臨まれたのではないかと思います。

ところで、ヤコブ家の「歴史」の主人公は、かなりのページが割かれているヨセフではなく、ユダのようです。私たちは、「アブラハム→イサク→ヤコブ→ヨセフ」という流れで創世記を考えますが、実はそうではありません。「アブラハム→イサク→ヤコブ→ユダ」という線で読む必要があります。

す。これは、マタイの福音書一章に書かれている系図を見るとわかるのですが、創世記ではヨセフのストーリーが詳細に書かれているために、注意深く読まないとユダが重要人物であることを見落としてしまいます。

これも聖書が読者フレンドリー、つまり「読者にやさしく」書かれていない一つの例です。しかし逆に考えれば、だからこそおもしろいとも言えます。パッと見てわかってしまえば、私たち人間はあまり勤勉でないので、適当な読み方しかないかもしれません。創世記の後半を読むときには、ユダを追っていくと大切なメッセージが見えてきます。

そうすると気になるのが三八章です。ヨセフが兄弟たちによってミデヤン人の商人に売られることが書いてあるのが三七章、ヨセフがエジプトに連れて行かれて、ポティファルに買い取られたことが書いてあるのが三九章です。そしてその間にはさまれている三八章はいかにも挿入に見えますが、内容はユダがしたことです。エルとオナンという二人の息子が与えられたこと、その二人の息子が死んだこと、その後ユダが遊女のところに入ったこと、ところがユダ本人が知らずに出かけて行った遊女が息子の嫁タマルであったこと、そのときにみごもったタマルが二人の子を産んだこと、が書かれています。

最初「なんでこんな章をわざわざ書く必要があったのか」と思いました。なぜ恥ずかしい部分を後代に残す必要があったのか。内容は褒められたものではありません。ユダとユダ家からすれば、抹消してしまいたいような記録です。ところが聖書全体の流れを見ると、この章は欠かせないものになっ

ていることがわかります。

ユダの流れで追っていくと、旧約聖書のつながりが見えてきます。旧約聖書は「創世記三八章↓ルツ記四章↓ダビデ↓イエスさま」という流れになっています。創世記三八章がなければ何が何だかわかりません。

さらに、信仰的な角度から考えれば、イエスさまがユダの末裔であることを示しているという読み方もできます。つまり、イエスさまは創世記の三八章のような現実の中から生まれてくださることを象徴的に表しているのです。

これはすごいインパクトのあるメッセージです。この本の第二章で、イエスさまの受肉は聖書の中の心的な概念だと説明しました。ユダ家のような問題の中にイエスさまが来られる、これが受肉です。兄弟の争い、親子の確執、偏愛、人格的な歪み、性のモラルに関わる問題など、私たちクリスチャンがあまり直視しようとしれない、できれば目を背けたいところにイエスさまが恵みをもって入ってこられる、そのような弱いところで豊かに働いておられる、これが聖書のメッセージなのです。私たちの信じてきた福音はエリート好み過ぎるかもしれません。福音は「現場」です。弱いところにこそ働くものです。

列王記——王さまを並べたいのではない？

次に、列王記に進みます。図15をご覧ください。列王記はもとも一つの書で、何か理由があつて二つに分けたようです。列王記第一と列王記第二の区切りを見ると、何か特別な意味があつたようには思えません。長さか何かで分けたように見えます。

第一と第二を一つにまとめてなめると、「列王記」という書名のわりに構成がいかに不自然です。というのは、第一の後半と第二の前半に、ドカーンとある話が組み込まれているからです。内容はエリヤとエリシャの生涯です。なぜこの話が真ん中にドカーンと置かれているのだろう。これは考える必要があります。

ここで、「実は、列王記は王さまを並べたかたのではないかもしれない」という推論が成り立ちます。それでは、列王記の記者は何を書きたかたのでしょうか。おそらく、王さまを並べたかたではなく、ページを一番割っている部分、すなわちエリヤとエリシャを書きたかたではないかと考えるほうが自然です。そう考えると納得がいきます。

次の質問が出てきます。なぜ記者は、そして神さまは、王朝時代にエリヤとエリシャが神さまのお仕事をしたことを描く必要があつたのか。実はこれが列王記のメッセージになつていきます。つまり、実際には王さまが統治していながら、神さまの目線はすでに王さまから離れ、預言者に移行していったということです。列王記は、預言者時代の到来を宣言している書なのです。そして旧約聖書の後半には、預言者に神さまのメッセージが託されていることが記録されています。そしてその流れは、イエスさまにメッセージが託される時代に向かいます。

ルカ文書——使徒の働きは一章八節では読めない？

新約聖書に目を向けてみましょう。ルカの福音書と使徒の働きをまとめてルカ文書と呼びます。おそらくどちらもルカが書いたのでしょうか。そこで、まず考えます。ルカはなぜこのような二つの文書を書かなければならなかつたのだろうか。

使徒の働きは、教会の設立とパウロの伝道の足跡をたどるといふ視点で読むのが普通で、二十章あたりまではそれで読むことができます。ところが、その前提で使徒の働きの構成を見ると、いかにも不可解な部分があります。それは二〇章以下のパウロの告白です。どうしてルカはパウロの告白にこれだけページを割いたのだろうか。活発に奉仕ができた十二年間のために九章、拘束された三年間



図15 列王記の全体図

のために七章を費やしています。拘束されていた三年間のほうがかなり詳しくなっています。これだけページを割くということは、やはり記者がその部分を書きたかったと考えるべきです。

そのように考えていくと、一つの前提があることに気づきます。ルカが書きたかったのは、前半部分に書かれている初代教会の拡大のことではなく、このパウロの告白の部分ではないか。私たちは、一章八節を手がかりに、神さまのみわざが、エルサレムからユダヤ・サマリヤ、そして地の果てに拡大したという価値観だけで使徒の働きを読んできたところがありますが、もし後半部分のパウロの告白が記者の意図だったとすれば、まったく違う見方をしなければなりません。

それでは、なぜルカはパウロの告白を書きたかったのか。それは最初の部分を見るとわかります。使徒の働きは「テオピロ」宛てに書かれています。「ちよつと待てよ。同じ書き方が聖書のほかの部分にもあったかな」とすぐに気づきます。そうです。ルカの福音書も同じ書き出しになっています。テオピロ宛だとすると、ルカは、使徒の働きの後半に収録されているパウロの弁明の部分をテオピロに読んでほしかったと理解することができます。使徒の働きもルカの福音書も、テオピロに読んでもらうという同じ目的をもって書いたに違いないということです。

これでなんとなくつながってきました。ルカは、自分の先生であり、囚われの身になっているパウロを弁護したかったのではないかということです。そのため文書だったのではないか、あるいはもっと具体的に、裁判資料にしたかったのかもしれない。

ルカ文書がパウロを擁護するための裁判資料だったという前提で読めるかを確認します。そうする

と納得がいきます。ルカは、パウロがローマを転覆させようとしている政治犯ではなく、純粋に宗教的な動機に基づいて行動していただけだったことをおそらく言いたいのです。それで、使徒の働きを書いたとします。しかしルカはそれだけで不十分と思ったのか、パウロが自分の人生を重ねているイエスの生涯も記録に残さなければならぬと考えた、とすればつじつまが合います。ルカ文書は、「ルカの福音書→使徒の働き」ではなく、「使徒の働き→ルカの福音書」という目線で後ろから見るとスッキリわかるような構成になっています。

図16（次頁）をご覧ください。実際に二つの書の構成を比較してみると、パウロの生涯とイエスさまの生涯がみごとに重なります。「ああそうか、これがルカの言いたかったことか」ということです。

書全体の構成から何を読み取るのか、その実例を挙げました。みことばの意味を考えると、もちろん正解があるわけですが、特に書全体を観察するとき、問いを発しながら考えていきます。もちろん正解があるわけではありません。しかし、そのように問いを発することで、いろいろなことに気づくことができます。

この章では、聖書の各書をチャートにして、その構成から見えることを学びましたが、聖書全体をチャートにすることもできます。聖書全体の構成について思い巡らしてみると、聖書全体が何を言おうとしているのかを立体的にイメージできます。とてもおもしろい作業です。

聖書読みの旅路もいよいよ締めくくりにさしかかってきました。今まで心に留めてきたことをふまえて、一つのケース・スタディーとして山上の説教を読んでききます。

山上の説教には、それぞれの神学的な伝統の中で、だいたいこういう意味ではないかという定番の解釈があると思います。この章では、なるべく神学的な読み込みをしないで、文脈をたよりに読んでみました。読んでみて、今まで聞いてきたことと少し違うかなと感じるかもしれませんが、神学で聖書を読んでもいいのではなく、文脈を丁寧に読みほぐしていくと、このような読み方になるという一例として、味わっていただければと思います。

第7章 山上の説教を文脈で読んでみる

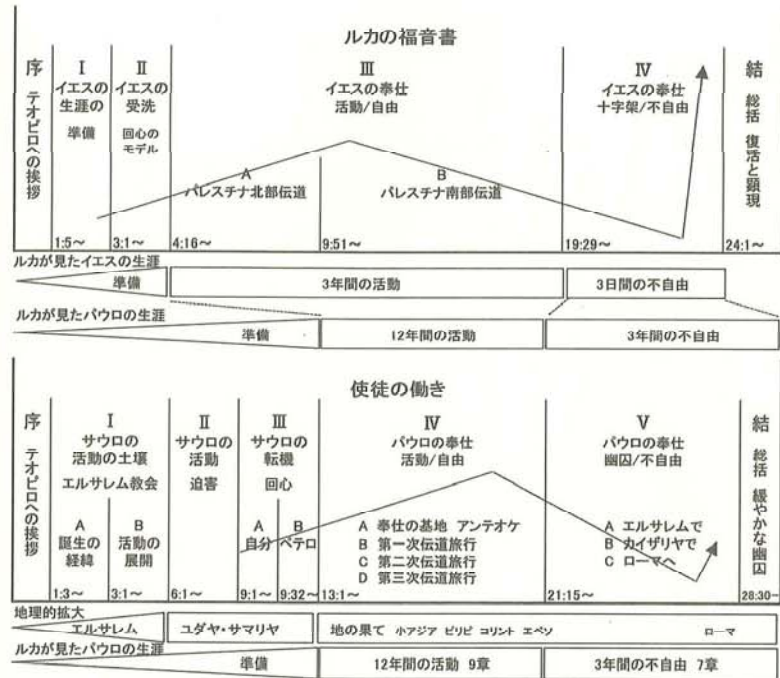


図16 ルカ文書の全体図

できないことが書いてある？

山上の説教は何を語ろうとしているのか。この問いに対する答えは、どのような原則で読むかによってかなり違ってきます。よく読んでみると、山上の説教は、人間の目指すべき信仰の世界を語っているのかという疑問が湧いてきます。山上の説教を「AだからB」（参照、第四章「恵みの原則」）の発想で読むと、このメッセージは、絶対到達不可能な、絵に描いた餅になります。自分はまだ足りないということを見せつけられ、ますます気持ちが悪くもなりません。

私なりの結論なのですが、山上の説教には、努力すれば達成できることはほとんど書いてありません。真面目な人であればそこそこできたつもりになれます。頑張ればやれると思わせるような、何もいえない線が打ち出されています。真面目な人ならますますやれそうだと思うかもしれませんが。しかし、真剣にやったら正直ハッキリ言って無理です。やはり「できないことが書いてある」と考えたほうがよいのだろうと思います。

福音の神髄を凝縮した山上の説教は、逆説の原則・恵みの原則で貫かれています。「スツと視点をずらしてみると、新しい恵みの世界が見えてくる」、そのようなメッセージを感じ取ることができればと思います。

実は、この「できないことが書いてある」という良い意味での割り切りは、聖書を読むときに非常に重要です。福音をどのように受けとめ、信じているかという根本とも深く関わる問題だからです。しかし、私たちはなかなかこのような割り切りをもって山上の説教を読みません。ところが、山上の説教はそこにツツコミを入れてきます。

「もしかししたら、自分にもできるかもしれない」といういやらしい発想が問題なのですよ。「立派なクリスチャンと自慢できるほどではなくても、自分もそこそこやれているから大丈夫なのだ」というような、ぬくぬくとあなたの中に巣くっている偽善的なものがどうにかならなければ、神さまの恵みのすばらしさはわからないのですよ。そこが割り切れないから、クリスチャンは他の人から偽善的だと言われてしまうのです。」なかなか手厳しい感じですよ。

そのようなことを心に留めながら、イエスさまが伝えたいと願われたことに可能な限り迫ってみてほしいと思います。

アウトライン

まず、全体の構成を確認します。以下のようなアウトラインを作りました。内容的に大切な部分も組み込んでありますので、きれいなアウトラインではありません。

序 あわれみをもって(四・二四) 群衆がどのような人たちだったか

セッティング(五・一一二)

I 真の幸いに生きる(五・三一二六)

A 幸いの目線は——低身から(五・三一二二) 八つの幸い

B 幸いを生きる——存在から(五・二三一六) 地の塩、世の光

II 真の律法に生きる(五・一七—四八)

A キリストが来られた目的(五・一七一—二〇) 律法・預言者と神の国

律法学者やパリサイ人の義にまざるもの(五・二〇)

B 律法の再解釈(五・二二—四八)

「人を殺してはならない」(五・二二—二六)

「姦淫してはならない」(五・二七—三二)

「偽りの誓いを立ててはならない」(五・三三—三七)

「目には目で、歯には歯で」(五・三八—四二)

「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め」(五・四三—四八)

III 真の恵みに生きる——人の評価と神さまの評価のはざままで(六・一一七—二七)

A 信仰的な行為(六・一一—一八)

善行の場合(六・一一—四)

祈りの場合(六・五一—一五)

断食の場合(六・一六—一八)

B 実際の生き方——天の宝、隠れた所におられる父の恵み(六・一九—七・一一)

地上の宝と天の宝(六・一九—二二)

宝を天にたくわえるのは、積み上げることを推奨するのではない

地上にあるものの限界——地上でたくわえたものは消滅する

宝のある所に心もある

集中すること——目が健全であることは健全なクリスチャン生活に必要な

背景① 神さまの備えに生きる——恵みの視点(六・二六)

② 隠れた所で見られる父の報いに生きる(六・一八)

地上で生きる(六・二二—七・一一)

単一であること(六・二二—二四)

心配しないで——空の鳥を見なさい(六・二五—三二)

神の国とその義とをまず第一に求めなさい(六・三三—三四)

さばいてはいけない(七・一一—一五)

聖なるものをむだにしてはいけない(七・六)

求めなさい(七・七―一二)

自分にしてもらいたいことは他の人にもそうしなさい(七・一二)

C 天国への道行き―狭い、恵みだけで(七・二二―二七)

狭い門から入りなさい(七・二二―二四)

偽預言者たちに気をつけなさい(七・一五―二〇)

「主よ。主よ」と言う者 ↑ ↓ 父のみこころを行う者(七・二二―二三)

わたしのことを聞いて行う者 ↑ ↓ 行わない者(七・二四―二七)

結 権威をもって

群衆の驚き―律法学者のような姿 ↑ ↓ 権威ある者の姿(七・二八―二九)

今回のアウトラインでは、全体を大きく三つに分けました。

I 真の幸いに生きる(五・三一―一六)

II 真の律法に生きる(五・一七―四八)

III 真の恵みに生きる(六・一―七・二七)

読者は基本的にヘブル人です。上から目線のヘブル人に対して、本当の幸いとは何か、その前提となっている律法をどのように読むか、そして恵みに生きるとはどのようなことか、このような流れが

あることがわかります。マタイの福音書は、他の福音書に比べてかなり意図的に書かれている書です。必ずしも時系列で並んでいません。イエスさまがされた説教も、いくつかの箇所編集してまとめられています。今回の大区分の区切り方が正しいかはわかりませんが、とりあえずそのように落とし込みました。

説教を聞いていた人たち

山上の説教は、五章からではなく、四章の最後から見えていく必要があります。四章から五章へのつながりの部分を見てみましょう。

23 イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいを直された。

24 イエスのうわさはシリア全体に広まった。それで人々は、さまざまな病氣や痛み苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかんの人、中風の人などをみま、みもとに連れて来た。イエスは彼らをやされた。

25 こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群

衆がイエスにつき従った。

- 1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに來た。
- 2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。

四章二四節には、「さまざまな病氣や痛みに苦しむ病人……」とあって、五章一節に「この群衆を見て」と書かれてありますので、山上の説教はこのような困難の中にある人たちに対して語られたことがわかります。つまり、豊かさが当たり前になってしまった私たち現代の日本人には、ピンとこない可能性が高いということです。そうだとすると、わかった風な読み方ではなく、イエスさまがおっしゃりたかったことを実感として感じていないかもしれないという前提で、謙虚に読む必要があります。さらには、困難の中にある人たちに対してイエスさまがどのような語り方をされたのかを、社会的・経済的には何不自由もなく、宗教的にはあらゆることが出来上がっていると思込んでいるヘブル人にメッセージとして伝えたかったのではないか、これが山上の説教です。

山上の説教を読むときには、二つの文脈に注意する必要があります。一つは山上の説教を聞いていた人、それからもう一つはこの福音書を読んでほしい人です。この二つの文脈をしっかりと考えないと意味を取り違えることとなります。特に、困難や貧困の中にある人に対して語られた説教であるという理解はとても重要で、この文脈を理解するとしなないとは、その後のみことばの風景がかなり違ってきます。このことを心に留めたうえで、山上の説教の最初の部分に出てくる有名な二つのみことば

に目を向けます。

一つは、「心の貧しい者」の意味です。同じような表現がルカの福音書六章二〇節にも出てきます。「貧しい者は幸いです。神の国はあなたがたのものだから。」「あれっ」と思います。なぜマタイの福音書では「心の」がついていて、ルカの福音書ではついていないのだろう。これは考えなければなりません。

語られた時が違うのではないかというのは一つの可能性です。実際、ルカの福音書に載っているのは山上の説教ではなく平地の説教と呼ばれています。このあたりはよくわかりませんが、一つ可能性として考えられることは、もともとの方が「貧しい者は幸いです」で、マタイは何か意図があつて「心の」を付加したということです。マタイの福音書とルカの福音書は書かれた目的が違いますから、何かわけがあつてもおかしくありません。

表現が「心の貧しい者」、あるいは「貧しい者」であつたとしても、山上の説教を聞いていた人は実際に貧しかったということは言えそうです。先に述べたようにマタイの福音書四章二四節を見ても、そのことがわかります。

それではなぜ私たちは、「心の貧しい者」を「心がへりくだった者」というように解釈してしまうのでしょうか。一つ考えられることは、解釈している人が本当の意味での貧困を経験したことがないということです。貧しさの経験がなければ、「心の貧しい者」を「心がへりくだった者」というように拡大解釈をするかもしれません。実感として感じ取れないときには、そこに何かを付け加えないと

気持ちが落ち着かないということだと思えます。それで「心がへりくだった」と解釈したのではないかということですが。しかしこの文脈では、心がどうだったかよりは、実際に貧しい人たちだったと読むべきです。

それでは「心の貧しい者」とはどういう意味でしょうか。「心も貧しくなった者」くらいでどうかなと思っています。人間は、あまりの困難さに心まで貧しくなってしまうことがあるからです。

「幸いです」という日本語は「祝福される」というくらいのニュアンスではないかと思えます。「ハッピー」のことでありません。貧しくてハッピーというのは、どう考えてもおかしな話です。

このようにして考えていくと、「心の貧しい者は幸いです」は、「困難や貧しさのあまり、心まで貧しくなってしまう者であつても、そのまま祝福を受ける。むしろそういう人こそ、そのままで神さまの祝福を受けている」というくらいの感じではないかと思えます。

ここに福音の本質が表現されています。神の国は、エリートが幅をきかす世界ではありません。逆に、学歴や経歴や才能や家柄や、そういったものがまったく意味を持たない、イエスさまを中心にした横並びの世界です。イエスさまの恵みは、それを受ける人間の側にどれだけすばらしいものがあるか、また逆にどれだけ足りないかによって左右されないものです。

もう一つは、「地の塩、世の光」の意味です。このことばの意味を考えると、山上の説教を聞いていた人、それからこの福音書を読んでほしい人という二つの文脈をしっかりと考える必要があります。

私たちはこのみことばを読んで、イエスさまを信じているクリスチャンが、それぞれ置かれた場所で輝くことができるという意味だと解釈します。これは拡大解釈として間違いではありません。しかし先にも述べたように、山上の説教を聞いていたのは困難や貧困の中にある人たちでした。つまりこのみことばは、本当の貧しさを経験したことのない豊かな現代人とは違う世界のことを言っているのです。

また、山上の説教を読んでほしい対象はヘブル人です。社会的・経済的に何の不足もなく、宗教的には、自分は律法を守ることによって義を達成していると自負していた人たちです。ですから、律法学者やパリサイ人が、豊かでない人は神さまの祝福を受けるために這い上がってきなさいという上から目線の気持ちを持っていたとすれば、このみことばはかなりインパクトのあるメッセージになっています。

この文脈を考慮すると、「地の塩、世の光」の意味は、「どのような境遇にある人も、ありのまま、地の塩、世の光として輝くことができる」というメッセージになります。イエスさまは、律法学者やパリサイ人が心の中でひそかに見下しているかもしれないような人たち、社会的弱者と言われるような人たちと関わりを持たれました。このみことばにも、「人の尊厳を認め、人を尊いとする」イエスさまのスタンスが表現されています。

律法学者やパリサイ人の義

さて、山上の説教の鍵の句はどれかを考えてみましょう。アウトラインを参考にしてください。おそらくこれが大切かもしれないと思われる節があります。第五章二〇節です。

20 もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません。

第二区分の中に入っていますが、一つの仮説として、もしかしたら山上の説教全体に影響を与えている句かもしれない、と考えます。「そうか。イエスさまが来られた目的が書かれているが、イエスさまは律法を否定するためではなく、成就するために来られた。でも、人間は律法を自分で達成することはできないなあ。」また二〇節には「律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」と書かれています。それで、何となくつじつまが合います。「そうか、律法学者やパリサイ人がどれだけ努力しても、そのレベルでは神の国に入れないということ。イエスさまはおっしゃりたかったということか、うんうん。」

さらには、「そうだとすると、律法学者やパリサイ人の義以上の義は、どうしたら私たちのものになるのか、これが山上の説教のテーマかもしれない、なるほど。」

それで、全体をながめなおしてみると、後半部分は、「律法学者やパリサイ人の義にまさるもの」がどういふことを説明しているように読み取れます。これで全体が読めそうです。

私は、第五章二〇節が山上の説教の鍵の句であると考えています。このみことばとの関わりで全体を解釈するとスッキリします。その後の部分の意味も明確になってきます。

イエスさまはこの線で、いくつかの律法の再解釈をされました。見える部分でクリアしようとするのが律法学者やパリサイ人の義、でも、イエスさまが見ておられるのはもつと内面的なものだということです。ですから、人間が頑張ればどうにかなると考えている人は、神の国は見えていないのです。本章の冒頭の部分で、山上の説教は、人間がやってもできないことが書いてあると述べました。頑張ればできることが書いてあると考えていること自体、律法学者やパリサイ人の発想です。本当は絶対に無理なのです。たとえば、「さばいてはいけません」一つをとっても、人間が自分ですら見ることでできない心の中に視線を向けておられる神さまの前に、字義どおりできると考えるほうがどうかしています。人間の力ではできないことをわからせるために書かれていると言ってもよいくらいです。なぜなら、その次に展開する律法学者やパリサイ人の義にまさる義の世界、すなわち神さまの恵みの世界を描くことが、山上の説教の、そして聖書全体の目的だからです。

見える世界と見えない世界

ここで、一つのこと気がつきます。「A—B」の関係があるかもしれない、ということですが、それだけで、一応わかりやすいように、

「イエスさまが見ておられる見えない世界」をA

「人間の領域に属する見える世界」をB

とします。このAとBをよく心に留めておいてください。後で何度も出てきます。

山上の説教の後半は、「A—B」の構図で話が進んでいきます。「A—B」の目線で整理しながら読むとスッキリ整理できます。ご自分の聖書でそこに書き込んでかまわない方は、AとBのしるしをつけながら五章二〇節以下を読むとよいかもかもしれません。

全部ではありませんが、以下にいくつか挙げてみます。

- 五・二〇 律法学者やパリサイ人の義 B
- 五・二〇 律法学者やパリサイ人の義にまさる義 A
- 六・一 人前で善行 B

- 六・一 天におられる父が報い A
- 六・六 自分の奥まった部屋 A
- 六・六 隠れた所 A
- 六・七 同じことば B
- 六・九 天にいます私たちの父よ A
- 六・一〇 天で A
- 六・一〇 地でも B
- 六・一一 日ごとの糧 B
- 六・一九 宝を地上に B
- 六・二〇 宝は天に A
- 六・二四 ふたりの主人に A B
- 六・三三 神の国とその義 A
- 六・三三 これらのもの B
- 七・一 さばいてはいけません B
- 七・二 あなたがたまさばかれ A
- 七・七 求めなさい A
- 七・七 与えられます B

- 七・一三 狭い門から入る A
- 七・一三 滅びに至る門 B
- 七・二一 「主よ、主よ」と言う者 B
- 七・二一 天におられるわたしの父のみこころを行う者 A
- 七・二二 あなたの名によって預言をし、……奇蹟を行った B
- 七・二四 家 B
- 七・二四 土台(岩、砂) A しかし……
- 七・二四 岩 A
- 七・二六 砂 B
- 七・二四 聞いてそれを行う者 A
- 七・二六 聞いてそれを行わない者 B

さて、AとBを意識しながら、さらに読んでいきます。六章を見てください。この部分でキーになるのは六章六節です。

6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見られるあなたの父が、あなたに

報いてくださいます。

「自分の奥まった部屋」はAです。「隠れた所」もA、イエスさまが見ておられる見えない世界のことで。「隠れた所に入る」とは、ひとりで部屋に入ることではありません。どれだけひとりになれる部屋でも、それはBの人間に見える外側の世界の話です。少なくとも自分からは見えています。

それでは、「自分の奥まった部屋」とはどういうことなのでしょう。Aですから、神さまが見ておられる世界、人間には見えていない世界のことです。そして、そこで祈るということです。つまりこれは、自分が見えていない、そして自分ではコントロールできない神さまの世界があり、自分の人生は自分で全部をコントロールできないという謙虚さをもって祈るということです。

「同じことばを、ただくり返す」(七節)すことは、神さまの世界では意味がありません。また、「あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです」(八節)と書かれています。この節は「私の思いをはるかに超えている神さまの見えない世界で神さまは豊かに配慮しておられるから、自分がお願いとかないかいということが重要なのではない」というくらいの意味になりそうです。

その線で、九節以下の「主の祈り」を読みます。人間の見ることでできない神さまの世界Aと人間に見える世界Bの対比で読むと意味がわかります。「日ごとの糧」はBですが、このような現実的な問題もAと深い関わりがあることを教えています。

「主の祈り」の中で気になるのは、一二節の「私たちの負いめをお赦しください」の意味です。これは人間の見える世界、つまりBです。このことの意味がわからなければ「主の祈り」全体の意味はわからないように思います。「負いめ」とは何を意味しているのでしょうか。もちろん、文字どおり自分が他の人に負わせてしまったものだと思います。しかしもう少し文脈を見る必要があります。

人間はどれだけ努力しても、他の人に負いめがあるような生き方しかできません。この点では、かりに法律学者やパリサイ人くらいに半端ない努力を重ねても、神さまの見えない世界Aの前には何の意味もないことです。なにせ神さまの関心は人間が見えないところに向いているのですから。神さまの視線が向いているのは「隠れた所」です。自分がどれだけ頑張ってみたところで、神さまの聖なる基準にはまったく届かないことを謙虚に認めている姿こそ、ここで言う「私たちの負いめをお赦しください」の心のあり方なのではないか。このように考えていくと、六章六節のみことばは、五章二〇節のみことばと並んで、山上の説教全体を理解するためのベースになっていると考えられます。

ちなみに、このあたりには「偽善者」ということばが何度も出てきます。この文脈で、偽善とは、見えない世界の問題、つまりAを、見える世界、つまりBに出してしまうことです。そうすると、必ずそこに嘘が入ります。それが六章一―六節に書かれていることです。自分が偽善者であることに気づいたときにどのように対応するかはさらに大切です。自分は偽善者ではないように努力しよう、という発想は、法律学者やパリサイ人の義、つまりBの発想です。これは結局ジレンマに陥ります。それよりはむしろ、自分が聖なる神さまの前には弱い人間であり、いつでも偽善的になり得ることを知

っていること、それから見えない世界のAを、見える世界Bに出してしまわないように注意することです。

天国貯金はできません

さて、六章一九―二〇節を見てみましょう。

- 19 自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。
- 20 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むことはありません。

「自分の宝を地上にたくわえる」のはB、「自分の宝は、天にたくわえる」のはAです。それぞれどのような意味があるのでしょうか。

地上で一生懸命献金すれば、天国貯金ができるという意味ではありません。天国貯金の発想は、この文脈にはなじみません。なぜかという点、地上で頑張れば天の祝福をゲットできると考えるのは、

「律法学者やパリサイ人の義」、つまりBだからです。神の国の祝福をいただくためには、それでは通用しないと語っているのが山上の説教なのです。誤解しないでください。献金することは意味がないと申し上げているのではまったくありません。

それではどうすることが勧められているのでしょうか。文脈からすると、金銭や経済は、地上の、いかにも生々しい、切れば血が出るような話ですが、そのような現実のレベルでしかない金銭や経済のことも、実は見えない神さまの世界と深く関係していること、つまり、現実レベルのことでありながら、自分ではコントロールできない見えない世界があることを認めて、真実に運用しなさいということではないかと思えます。

第一にすべき神の国とは

六章三三節のみことばに進みましょう。

33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

さて、「神の国とその義」とは、神さまの見えない世界、つまりAです。「これらのもの」はBです。そうだとすると、このみことばは、「現実の見える世界ではなく、神さまの見えない世界を第一にするとき、現実のことについてはあまり心配はいらない」という意味になりそうです。教会に行くこととピクニックに行くことをてんびんにかけて、どちらを第一にしますか、という話ではありません。

教会に行くことはもちろん信仰的ならばらしい行為だと思いますが、教会に行くことで神さまを第一にしているという言い方はできません。もし、教会に行くことで神さまを第一にしていることを証明しようと考えていたら、それは律法学者やパリサイ人の義です。神の国では、そのような発想自体意味がないというのが山上の説教です。また、教会に行くという行為は、見える世界のことですから、Bです。どれだけ教会に行っても、見えない部分で本当のところ神さまのことを大切にしているということもあり得ます。そして、神さまは、見える世界をご覧になっているのではなく、見えない世界を見ておられるのですから、私たちがどれだけ見える部分を整えてもあまり意味がありません。律法学者やパリサイ人の義では届かないとしたら、あと私たちの手に残っているものは何もありません。律法学者やパリサイ人ほど努力しても、どれだけかたぎになっても、品行方正になっても、真面目になっても、それでも神さまの前には届かないというのですから、絶望するしかありません。聖書はシンプルに語ります。

「真面目だけではダメだ。」

それでは、人間はどうしたらよいのでしょうか。ヒントが六章二六節に書かれています。「空の鳥

を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に収めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もつとすぐれたものではありませんか。」

イエスさまは、私たちがあくせくする現実の問題については、神さまがやってくださることに委ねることが大切だと語られました。「やっていただく」、これしかないのです。非連続性の原則がよく出ているところです。

さばいてはいけない、マジで??

- 1 さばいてはいけません。さばかれないためです。
- 2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。
- 3 また、なぜあなたは、兄弟の目の中のちりに目をつけるが、自分の目の中の梁には気がつかないのですか。
- 4 兄弟に向かって、「あなたの目のちりを取らせてください」などとどうして言うのですか。見なさい、自分の目には梁があるではありませんか。

- 5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

この部分は、逆説の発想で読まなければ、かなり意味を取り違える箇所です。恵みの原則・逆説の原則に注意しながら、慎重に意味を考えていきたいと思えます。

「さばいてはいけない。」クリスチャンがいちばん悩む問題の一つではないかと思えます。「頭ではわかっているんだけど、きょうも会社のあの頭にくる同僚を心の中でこきおろしたなあ」と、夕方になると自分を反省し、罪責感に襲われることもあるかもしれません。頭では良くないとわかっているのですが、人間が神さまの前に自分の姿を正直にさらけ出したとき、クリアすることが最も難しいことではないかと思えます。社会生活を送りながらこの基準をクリアするのは不可能に近いことです。

それにもかかわらず、牧師は講壇から平気で語ってしまいます。信徒さんから、「へえ、この先生、人をさばいたことないのかなあ。信徒さんをさばいたことないのかなあ」と思われてしまうかもしれません。

説教で語るのとは簡単です。でも、心底、本当ですか。正直申し上げて、自分を棚に上げて、自分ばかりできているというそぶりでもしなければ、このみことばは語れません。神さまは心の中を見ておられる方ですから、小さなごまかしもききません。そういう方を前にして、「さばいていない」と言え

る人がいるでしょうか。もし、「自分はさばいていない」と言えるだけの自信があったら、その人は、よほど自分が見えていないか、イエスさまになってしまったか、どちらかです。「自分は聖くされたから、さばかない人間になった」と感じているとしたら、どういう意味で「さばいていない」のかを点検する必要があるでしょう。

もし「さばいてはいけない」を基準として示すことが目的だったとしたら、その「さばいてはいけない」という言い方自体が人をさばいています。ですから、「さばいてはいけない」は、イエスさまだったら最もおっしゃらないようなもの言いです。それでもイエスさまがあえてこのような言い方をされた理由は、ただ基準として示したかったのではない、何か他の含みがあるはずだというふうに考えるべきです。「さばいてはいけない」という言い方はキレッキレの言い方ではなく、なんとも言えないゆるさと温かさ、あるいはイエスさま一流のユーモアがそこにあつたと思うのです。

しかし人間の世界では、ここに上手なすり替えが入り込む可能性があります。「さばいてはいけない」と言う瞬間だけ自分を、このみことばを聞かなければならぬ対象からはずしてしまします。そのようなことでもしなければ、他人に向かって言えないような鋭い言い方です。自分が人をさばかないと決めたら、人に「さばいてはいけない」と言えないはずなのです。それがその人をさばくことになるからです。これが「自分の目の中に梁が」ということなのでしょう。

一つ確認しておかなければならないことがあります。神さまがご自分のかたちを組み込まれた創造のみわざである人間には、高度な知性・意志・感情が備わっていて、私たちはそもそもいろいろなこ

とを評価するように造られているということです。イエスさまも、「さばいてはいけない」と言われたすぐその後で、そのことを付け加えられました。一節とあわせて六節をご覧ください。

1 さばいてはいけません。さばかれないためです。

6 聖なるものを犬に与えてはいけません。また豚の前に、真珠を投げてはなりません。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたを引き裂くでしょうから。

何かを評価しなくなるのがクリスチャンの成長だったら、それは「人間、やめますか」の世界です。あるいは、「やめる」ところまではいなくても、自分に与えられた評価する能力について誤解し、評価能力をあたかも持つていてはいけないかのように抑えて生きている人間を見たら、神さまは悲しまれると思います。

イエスさまは、「さばくのはよいことではないけれども、評価する姿は人間が本来持っている資質であり、人間はきちんと評価しなければ生きていけないのです。正しい評価ができなければ、人生を無駄にしてしまうこともあるのですよ。むしろ、そのことを健全にできることは人間として大切なことなのです」と言われました。人間性への理解と、温かい共感が表現されているように思います。

こういう反論も出るでしょう。「評価することとさばくことは違う。」しかし、実はこれは泥沼です。どこが境目なのでしょう。心に平安があればさばいていないというのも一つの見識です。しか

し「こまでは「評価」の範囲、この先は「さばくこと」の境目などわかりませんし、平安が基準ならその日の体調によっても変わってしまいます。その日の体調で、「あなたを評価したけど、さばいていくわけではない」などと言われたら、周囲はたまったものではありません。そもそも、境目はだれが判定するのでしょうか。判定する権利を持つのは神さましかおられないはずですが、私たちのやっていることは、せいぜい自分で基準を作って、自己満足しているくらいなものです。

「評価はポジティブなこと、さばくのはネガティブなこと」、これも一つの説明です。「その人のために祈ってあげられれば『評価』、祈ってあげられなければ『さばくこと』」。これも説明としてあり得ます。しかし、なんとなく言い訳に聞こえないでもありません。山上の説教が言いたいのは、そのような発想でぬくぬくしているのがクリスチャンのいやらしさだということです。

発想を少し変えてみます。ここには、イエスさま一流のユーモアの感覚がありそうです。そして、ザクツとひと言で言えば、人間がどれだけ努力してもできないことが書かれているという読み方もできるのではないかとということです。成長したらだれでもこういうクリスチャンになれるという青写真が書かれているのではないと考えたほうが、文脈からは納得がいきます。

この節はかなり誤解されていると思います。実際、クリスチャンでない方からも、「クリスチャンってのは、こういう生き方をしているんですよね」というイメージで見られているかもしれません。もしかしたら、そのこととあわせて、もう一つのことを思われているかもしれません。「だから、クリスチャンは偽善っぽいんだよ。」それは誤解だと反論したくなりますが、正直そうかなと思わない

わけでもありません。見抜かれてしまっているのです。

山上の説教が言いたいのは、「人間はさばくものだ。そう認めたほうが正直だし、さらに大切なことは、だからこそ神さまの恵みが必要で、やっていただく以外にないことがわかる」ということです。人間が神さまの前に無力であることを教えるために書かれているという面があるのです。

人間は弱いからさばいてもよいと言いたいわけではありません。良いことでないと知りつつ、それでもさばいてしまうのが切ない人間です。また、やりたくないのに人の評価をしなければならぬ場面もあります。そのような人間性への共感ができるとき、だから神さまの恵みでやっていただく以外にないということがわかる、「できないにもかかわらず」生かされているのが私たちだということがわかる、まさに、神さまによる非連続性の恵みの世界が広がっている、そこに読む者の心と視線をいざなっていくのが山上の説教なのです。

「さばいてはいけません」の意味は、人のことを評価するなどいうことではなく、おそらくこの文脈から判断すれば、「何かというところの悪いところばかりに目が向きやすい自分の姿に正直になれないで、自分の評価を過信し、場合によっては自分のほうが劣っていることに気づかないくらい自分を『盛る』ことで自らの身の丈を見失う姿にブレーキをかけている」ということでしょう。神の国では、律法学者やパリサイ人の義を達成できるかが問題なのではなく、自分の身の丈に正直でない姿が恵みを受け損なうという意味で致命的なことなのです。自分の姿を「盛る」ことは、私たち人間が考えている以上に神さまの前に深刻です。私たちは素でいいのです。

自分の目から梁を取り除く落とし穴

二節と五節をご覧ください。

2 あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。

5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

一見「AだからB」の発想で書かれているように受け取れるので、「自分が人をさばけば、神さまは自分を、自分が人をさばいたのと同じだけさばくだろう」と考えてしまいます。文字どおり取れば、そのとおりです。

また、「まず自分の目から梁を取りのけなさい」と書かれているから、「いかん、いかん、まず自分から改めよう」ということになります。とても真実です。この文脈も語っているとおり、自分を客観視することはクリスチャンとしての成長に欠かせません。私は牧師ですが、特に自分を見る視点は重

要であると思っています。自分を客観視できなければ、牧師は裸の王さまになることは免れないでしょう。自分を客観視しようと努力を重ねても、それでも難しいかもしれません。

しかし、「まず自分の目から梁を」というみごとばを、「人のことをとやかく言う前に、自分から改めよう」という意味だと考えると、すぐに自己矛盾に陥ります。自分から改めるといふ発想は、山上の説教の文脈を考えれば、律法学者やパリサイ人の義、すなわちBです。神さまのさばきが怖いから人間が何かをやってクリアしようとしているだけです。もしクリアできたら、律法学者やパリサイ人のように自慢するかもしれません。それだけではありません。できない人を見下げて、自分の優越感を満足させるかもしれません。

もしそうだとすると、おもしろいことになります。「さばいてはいけない」という基準を自分に課し、本当はできていないのにその基準をクリアできていると思ひ込み、そうすると心理的に、できない人を見下げることが避けられなくなるので、結局行き着くところは、「さばいてはいけない」という基準をクリアすることで、自分より劣っている人をさばく落とし穴にはまるといふことです。

イエスさまが言われた梁とはどのようなものなのか、おそらくとても目の中になど入らないすこいものです。それが目の中に入っていて、それにもかかわらず、それに自分で気づくことができない状態、イエスさまが「自分の目の中にある梁を」と言われたのは、恐ろしくあり得ない構図なのです。

そのようにものすごいアンバランスな構図を引きずりながら、本人はそのことに気づくことができないのが人間だということです。

その構図をクリアするためには、自分でどれだけ努力しても無理です。なぜならば、自分でそのことに気づくことができないからです。イエスさまは、律法学者やパリサイ人の義に「まさる」義、すなわちAが必要であり、そのAは、人間が何かをすることで決して手に入れることができないものだと言われました。

人を赦すことで神さまからの赦しをいただくという発想は、人間の心理の負担を軽くすることはできません。「私はあの人を赦しました。ですから、私を赦してください」と言えば、自分の心の中にあるバランス感覚は満たされず。しかし、それ以上ではありません。神さまの赦しは、人間が何かをしたことの引き換えにゲットできるものではありません。

ここには一つ大きな思い違いがあります。それは、人間が自分で何かをすれば、神さまの聖なる基準に到達できるという思い違いです。人間が何かをすること、かりにそれがどれだけ素晴らしいものであっても、神さまの聖なる基準は桁の違う話です。聖は物理的尺度で測ることはもちろんできませんが、ものたえとして申し上げれば、人間の聖が一センチだしたら、神さまの聖は月までの距離くらいでしょうか。もし引き換えのような発想が微塵でも混じり込んでいたら、それは神さまの聖さの桁を理解できていないということです。

四節の「自分の目には梁があるではありませんか」というみことばは、その前提として、人間にとって大切なのは、神さまの前に自分の身の丈を認めていることだということです。思えないかと思えます。そうだとすると、自分の正直な姿に目が向かない気の毒さをイエスさまは示そうとされたとい

考えることができます。

ですから五節は、一見「AだからB」の発想で書かれているように見えますが、それだと意味がおかしくなります。このみことばは、「自分の正直な姿に気がついたら、他人の目のちりを取り除くことができるほどまでにはつきり見えるようになる」くらいの意味ではないかと思えます。「自分の目から梁を取り除いたら、他人の目のちりを取り除くことができる権利を手に入れられる」という意味でないのは明らかです。

「さばいてはいけません」というみことばをユーモアの感性や恵みの原則で読めなければ、残されている可能性はただ一つ、がんじがらめの原因・結果論、つまり「AだからB」の発想で読まなければならなくなります。「神さまからさばかれないために、自分も人をさばかないようにしよう。」しかしこれをやると、「さばいてはいけない」という基準をクリアするために努力する生活になります。一日中ハラハラのしどおしです。そして夜、一日を閉じるとき、「神さま。きょうも一日、なんとか基準をクリアしました。でも、ヘトヘトです。疲れました。……でもイエスさま、何とか頑張ってやりましたよー」こうなったら神さまは裁判官です。少しやってみて無理だとわかると、あとはお茶を濁すしかありません。そうすると、心の二重生活になります。イエスさまのおっしゃり方では「偽善者」です。

もし、そんな自由のない、苦しい生き方がクリスチャンの人生だとしたら、あなたはそういう人生に人を招きたいと思いませんか。クリスチャンの人生は、もっと自由なはずです。イエスさまの十字架

によって、自力で基準を達成しなければならぬ束縛から自由にされ、心配しないで一日を終わることが出来る生涯であるはずですが、もっと生き生きと、与えられたいのちを生きることが出来るのがクリスチャンの恵みの生涯であるはずですが。

先のような就寝の祈りをイエスさまが聞かれたとしたら、おそらくイエスさまは悲しい顔をされるでしょう。「よく頑張りましたね、わたしのために。本当にありがとう。でも、わたしはあなたに、そんなことをお願いしたのではないのですよ。」

もう一つ大切なことがあります。それは、本人が気づかないうちに、実は恐ろしい事態が進行しているということです。さばかないという基準をクリアするたびに、宗教的優越感というプライドが病魔のように心を蝕んでいきます。自分も気づかないうちに、「自分は優等生とは言えなくても、まっとうにやってきたし、そこそこいけるクリスチャンって言ってもらえるかも」みたいな思い込みにはまっています。皮肉なことに、そのことで御国から離れてしまいます。それが結果的に神さまの恵みを拒むという致命傷になる場合もあります。

「さばいてはいけません」というみことばを原因・結果論で読むと、山上の説教が言いたいことと真反対の結論に行くことになります。残念なことですが。しかし、評価能力が備わっている人間にとつて一番微妙で難しい、また痛いテーマであるからこそ、イエスさまの温かいユーモアを感じるのです。「そんなに、きゅーつと自分を追い詰めるのではなくて、自分でできないと思えるんだったらそれで十分。自分ではできないと思えるからこそ健康的。だから委ねられるのですよ。ゆったりした気持ち

で、いっしょにやっていきましょう」というイエスさまの声が聞こえてきそうです。

さばくことが偽善？

次に五節の「偽善者よ」という言い方に目を向けます。

- 5 偽善者よ。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はっきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

人をさばくことはなぜ偽善なのか。これは大切な問題です。

前にも述べたとおり、偽善とは見えない世界の問題、つまりAを、見える世界、つまりBに出してしまうことです。見えない世界に置いておかなければならないものを見る世界に出すと、必ずそこに嘘が入ります。なぜ人をさばくことが偽善なのかというのはその構図で理解することができます。

人をさばくときには、私たちはほとんどその人の外側を見ています。ああしたこうしたで排除してしまいます。しかし、それは見える世界のことです。イエスさまが見えないところを見ておられるとすれば、そのようなやり方は、見えない世界で豊かに働いておられるイエスさまを排除してしまうこ

とになります。逆に、その人の外側ではなく、その人そのものを正しく見ることができるとき、それはさばいているというよりは、評価していると言えるかもしれません。さばくというのは、神さまが目線を送っておられる見えない部分でその人を評価すべきところを、見える世界だけで判定してしまうという意味で、まさに偽善なのでしょう。ですから、さばいてはいけないという大変難しいこの問題も、見えない世界を大切にするというところに処方箋がありそうです。

「さばいてはいけない」のみことばの意味をまとめてみます。「神さまの見えない世界に究極の土台を置いて生きるために、人の見える部分だけに目を向けて、そのことに振り回されてしまうのではなく、自分を自分で見ることができるとして、そのことではつきり見える視点が与えられて、他の人を適切に判断できることがあるのではないか。ただし人に対する評価は、その人を抹殺するまでにはいかないう節度が大切である。」このくらいの意味ではないかと思えます。

狭い門は狭くない？

律法学者やパリサイ人の義ではなく、それにまさる義が必要であるというのが、山上の説教のテーマであることを学びました。神さまにやっていたく以外にないのですが、具体的にどうしたらよいのでしょうか。

七章一三—一四節をご覧ください。

13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。

14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。

「狭い門から入る」これが答えです。ここで問題になるのは、イエスさまが「狭い」と言われたことの意味です。私たちは普通このように考えます。「真面目に頑張って信仰生活を送っている人↓狭い門から入れる人」、「ちゃらんぼらん人↓大きく滅びに至る門から入る人」。ところが、この考え方でいくとつじつまが合わなくなりそうです。ここが問題です。

五章二〇節には、「律法学者やパリサイ人にまさる義」がなければ天国に入れないとありました。山上の説教の鍵の句です。その線で考えると、真面目に頑張って信仰生活を送っていることが狭い門から入る要件でない可能性があります。これは考えなければなりません。

真面目に頑張っていることに問題があるのではありません。お互い、真実な歩みを心がけたいと思います。しかし問題なのは、真面目さをカードにしてしまうこと、頑張れば自分の力に入れると思ってしまうことです。そういう意味で、真面目さは両刃の剣です。真面目さは、律法学者やパリサイ人のように、自分でもやれるんだと思込ませる魔力を持っています。マタイの福音書はヘブル人を意

識して書かれています。律法学者やパリサイ人のように、律法を文字どおり守ることにエネルギーを注ぎ、それがあから大丈夫だと思っている人は神の国には入れないことをイエスさまはおっしゃりたかったのだと思います。

そうだとすると、律法学者やパリサイ人のように、律法を文字どおり守り、それがあから大丈夫だと思っている人にとって、逆説的に神の国の門は「狭い門」になってしまおうという意味ではないかと考えれば、つじつまが合います。ちゃらんぼらんだから入れない狭さではなく、真面目なだけに自力でやろうとするから入れない逆説的な狭さが問題になっているのです。

それで意味がスッキリします。神の国は律法学者やパリサイ人の義ではダメで、自分ではできないということを知っていることだけが、神の国の狭い門から入ることができる要件だということです。ですから、簡単です。修行も根性も時間も要りません。自分でやるのが神の国では問題になることに気づけばよいのです。自分でやろうとするのが問題なのですから、委ねてしまえばよいのです。

といいながら、実はこれが人間にとって一番難しいことなのかもしれません。特に、真面目な人、意志の強い人、善良な人にとっては、何よりも難しいことになってしまいう可能性があります。

このみことばは、逆説の発想、恵みの原則がとてよく表現されている部分です。狭い門は、自分でこじ開けようとしても決して開きません。真面目さも通用しません。しかし、自分が神さまの前に絶望的だという、実にシンプルな一点がわかったら簡単です。天の「狭い門」は、音も立てずにスツと開きます。そして、その一点がわかった人が並んでいるのが聖書です。それ以外の要件は問われて

いません。

イエスさまの恵みに生きるとは、こういうことです。そしてこの原則は、神の国に入れていただいた後も変わりません。継続してこのスタンスに生きるだけです。神の国で人間ができることはこれしかありません。いつのまにか、自分でやりたくなくなるのが人情ですが、神さまが全部やってくださいから、とにかく明るい開き直りをもって委ねていくだけです。

神さまが全部やってくださいというのは、自分は何もしなくなるという意味ではありません。一人の社会人として、クリスチャンとして、普通の生活を送りながら、自分が守られ、信仰者として成長するためには神さまの前に何もできることがない、「自分ではやれない意識」を持っていることです。でも、神さまがしてくださいるので、安心です。生きるための努力もするでしょう。自分を向上させるための努力もするでしょう。それでありながら、心の中では、「やっていただく意識」が不思議なように成長とともに深まっていきます。

大切なのは見えない土台

最後に、家のたとえです。七章二四―二五節を見てください。

24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行行者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができません。

25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。

以下、賢い人と愚かな人の対比で話が進みます。

ところで、イエスさまはこの締めくくりの部分で、クリスチャンが一つ疑問に思っている可能性がある大切なテーマを織り込んでくれます。

山上の説教は、律法学者やパリサイ人の義では天の御国に入れないというメッセージが論調になっていました。その原理は、奉仕をした者にも変わらずに適用されます。七章二二節を見てください。

22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって

預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』

イエスさまは、一生懸命仕事や奉仕をした人たちが、そのことを頼りに天の御国に行こうとしたときに、それがカードにならないことを示されます。これらの仕事は、見た目は信仰的なことなので、

一見Aに見えますが、実はBだというメッセージです。奉仕する者にとっては、とても大切なポイントです。

ところが人間は弱いので、そう言われると逆の極端にいきます。結局いろいろ努力してやっても意味がないのだということになりかねません。そこで「家」を登場させます。ここに、イエスさまが「さばいてはいけない」と言われた後に評価することの大切さを説かれたのと同じように、土台の大切さを示しつつ、見える世界である家に読者の視線を持つていく絶妙なバランス感覚があるような気がします。律法学者やパリサイ人たちが建て上げたものは、人間のわざだから壊すべきだということではありません。それも尊いこととして評価されているのです。このようなさびげないところにイエスさまの恵みの豊かさが示されているように感じます。

構図はシンプルです。家に見える世界、ですからBです。しかし、見える世界といってもどうでもよいものではありません。一生涯かけて建て、その中に自分の存在と人生を入れてしまうものですから、非常に現実的であり、かつ重要です。それに対して、土台は見えない部分、ですからAです。普段は見えないのですが、実は見える部分よりも重要です。どれだけ見える部分を良くしても、見えない世界がよい加減だと倒れてしまいます。見えない世界に究極の土台を置いているのがクリスチャンの人生観です。

このたとえ話では、Aの見えない部分の重要性を説きながら、Bの部分に一度はしっかり目を向けるように導かれます。Aだけに目を向けよと言われれば、「私たちクリスチャンは見える世界をどの

ように大切にしていけばよいのだろう。人間は生きるために、自分を向上させるために、やはり努力も必要なのではないか」という疑問をだれもが持つでしょう。この意味で、最後に家が登場するのはインパクトがあります。家は人生です。いただきもののいのちを尊び、与えられた賜物を生かしながら、家を建てるように、自分のオリジナルの人生を建て上げていくのです。しかし、その大切な家をどこに乗せているかというのがこのたとえ話のミソです。

さて、ここで嵐がやってきます。見えない部分Aは、何か特別なことでも起きなければ見えません。そして、見える部分Bが同じに見えても、見えない部分Aはかなり違っていている場合があります。それが明らかになる時があります。それは嵐が押し寄せた時です。私たちの生涯に重ねれば、何かで行き詰まる時、このままではやれないと思うような問題にぶつかる時です。家庭の問題であったり、子育ての問題であったり、夫婦の問題であったり、事業の問題であったり、経済の問題であったり、いろいろです。しかし、どのような問題であっても、自分の存在の土台、つまり自分のアイデンティティを土台から揺るがすような問題です。私たちはそのときに、一つのことを気がつきます。それは、人生の土台は砂、つまりAが不確実なままではいけないということです。

これでなんとなく文脈の見晴らしがよくなります。六章三三節には「神の国とその義」と書かれています。これはA、つまり神さまの見えない世界です。人生で嵐が押し寄せても揺るぐことのない見えない世界に土台を置いておきましょう、ということなのです。

土台が確かならば、土台への不安が軽減されます。そうすると、Bに目を向けることの意味がだんだんとわかってきます。家を建てること、これは見える部分Bですが、Aが確かであればあるほど、Bを建てることに健康的にエネルギーを使うことができるようになります。むしろ不安がなくなつた分、今まで以上に自分らしさを発揮できるかもしれません。見た目は今までと同じように、自分を成長させるために努力し、現実の問題に取り組みながら、内側では、「自分が家を建てているのではない、だから大丈夫だ」と思える、フツと力が抜けている、妙にしみじみしている、ところが、そんなことをしていると、やはり人間は弱いので、いつのまにか肩に力が入って、見える部分にだけ目がいくこともあります。そうすると、「いや、まてよ。少しやり過ぎたかな」などと調整しながら、イエスさまと共に歩んで行くことができる、このたとえはそのことを示唆しているように思うのです。これが非連続性の世界なのでしょう。

ここで一つ、文脈をきちんと読まないという意味を間違えやすい表現があります。二四節には、「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができません」と書かれています。「聞いて行う者」のところは、「行うのか」と思ってしまうのです。しかし、見えない世界に土台を置くのがA、律法学者やパリサイ人の人生観はBです。そうだとすると、ここでイエスさまが言われた「行う」の意味は、律法学者やパリサイ人と同じようなBの意味で律法を「行う」ことではありません。「聞いて行う」とはAのことですから、「イエスさまが山上の説教でおっしゃったことを受けとめて、見えない世界で生きること」くらいの意味になります。「行う」という表現に惑わされないことが大切です。

一つの例題として、山上の説教を学んできました。山上の説教は、福音がどのようなものか、イエスさまが描こうとされた神の国がどのようなものかを凝縮して教えてくれる箇所です。文脈を見ながら意味を探ってみました。言うまでもなくこれは一つの試みにすぎません。意味を探るプロセスで、あるいは事実誤認があるかもしれませんので、お気づきの点がありましたら教えていただければと思います。また、ここに書いたことはファイナル・アンサーではありませんので、みなさんの主を愛する温かい思いと豊かな感性を動員して、さらに豊かな恵みを山上の説教から汲み取っていただければ幸いです。

おわりに——恵みに生かされる世界へ

聖書を立体的に読む旅路もいよいよこれでお開きです。お話を締めくくる前に、大切なことを確認したいと思います。

もう一度、第四章に戻ってください。聖書読みのコツをいくつか挙げました。その中でも特に大切なのは、最初と最後に挙げた恵みの原則と非連続性の原則です。

恵みの原則とは、人間の側にそれを受ける理由がない「にもかかわらず」、ふさわしくない恵みを、ありのままの自分が受けているということ。それが福音です。私たちが恵みを受ける理由は、私たち人間の側にあるのではなく、神さまの側にあります。神さまの愛です。

クリスチャンも含めて私たちが誤解しやすい律法学者やパリサイ人の義と、神さまによる非連続性の恵みの方法を図17にまとめました。

神さまがしてくださるから委ねればよいといっても、私たち人間が信じる必要もなければ神さまを

いきたいと思います。せつかく与えられた一度きりの人生なので。

神さまにやっていたく恵みの世界、神さまが開いてくださる非連続性の世界をお互いに味わって

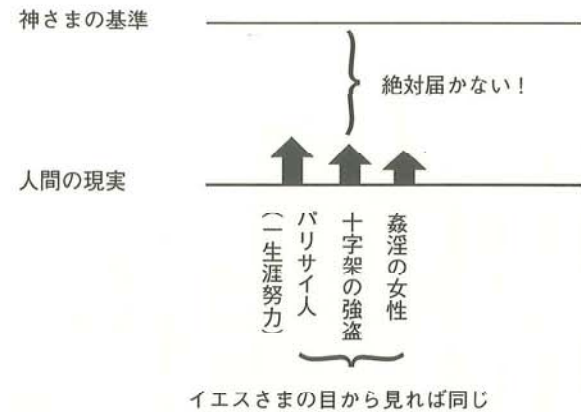
この発想の転換は、人生のどこかで起きるようです。そのとき、神さまのイメージが変わります。必ずしもクリスチャンになる経験と重なるわけではありません。クリスチャンになった後でも、「自分はずいぶん自分で頑張ってきたなあ」と思えたら、そして「このままではだめだなあ」と思えたらギア・チェンジです。人間の側では何も要らないのです。ですから、簡単なのです。ギア・チェンジするのも今でよいのです。今が旬なのです。

神さまの方法を信じて受け取っていくとき、思いも寄らない世界が広がっている、それが非連続性の原則です。「なんでこんなに、自分で自分をどうにかしようと頑張っていたんだろう」と思えたら、恵みのチャンスです。「そうだ。自分の人生も神さまにやっていたくことにしよう。」これが非連続性の世界です。

愛する必要もないという意味ではありません。「結局全部、神さまの絶対的な権限だけのものが決まっているんだから」という開き直りでもありません。神さまが期待しておられる関係は取り引きの関係ではなく、愛と信頼に土台した人格関係だからです。神さまとの人格関係の中で、これだけすばらしいものをもって臨んでくださる恵みのオファーを、「そのままいただきます」と受け取ることに、これを「信じる」、または「信仰」と言います。人間の側で何かを差し出す必要はないのです。ですから、簡単なのです。信じるのは今でよいのです。

■律法学者やパリサイ人の義

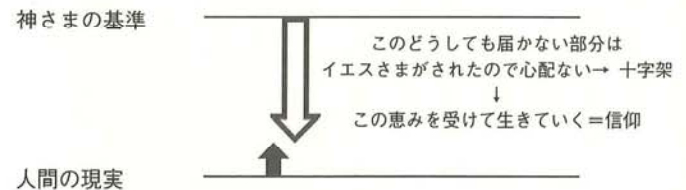
神さまの基準に到達できれば御国に入れる！→際限のないガンバリ



■神さまの方法—恵み

人間の側からではなく、神さまの側からのオファー
「わたしのやり方があるから、それにのりませんか」

↓
ここが重要！ やるのは神さま



私たち人間の側には、功績はない—信じることも含めて
神さまは根拠なしに強がりを言っておられるのではない→ 十字架

→ ★聖書の中心 新約のメッセージ

図17 律法学者やパリサイ人の方法と神さまの方法

ここまで読んでくださったことを心から感謝します。何か一つでも心に留まったことがあれば、あるいは改めて聖書を読んでみようと思いきつかけになったことがあれば、これ以上の幸いはありません。

今、活字離れということが言われます。社会は忙しく複雑になり、逆に、情報はインターネットであまりに簡単に手に入ってしまう。そのことで、生活の中で「ゆっくり」という感覚が希薄になり、腰を落ち着けて聖書に向き合う機会を持ってなくなっているかもしれません。

興味がわかなければ、みことばの意味を探ろうという気にはならないでしょう。少し気合いが要りますが、文脈を見ながら、そこで何が語られているのかを考える読み方はやってみる価値があります。みことばの意味を問い直すことで与えられる「気づき」は、少しワクワクします。

この書を読んでくださったすべての方に、神さまの祝福が豊かでありますようにお祈りいたします。

二〇一五年五月

河村従彦

〈巻末資料〉——帰納的聖書読解法の基本フォーマット

以下は、一つの書全体を学ぶ方法です。基本的に参考書は使いません。参考書を見るのは、学びの最後の最後で、自分の解釈が大げがをしていないかを確認する程度です。原則、聖書本文だけで学びを進めます。

一 章名をつける

まず、章名をつけます。たとえば創世記ならば、

一章 天地創造

二章 人間の創造

三章 善悪を知った人間

四章 カインとアベル

(以下、省略)
このような感じですが。
いくつか注意点がありません。

- (1) なんとなくそろっていること——二文字、十文字などが混じっていると落ち着きません。
- (2) 一般的すぎないこと——章名を見たらその章だとわかることが理想です。
- (3) 奇抜すぎないこと——本人だけしかわからないようなものは避けたほうがよいと思います。
- (4) その章のイメージを考えること——内容全体を盛り込もうとすると無理があります。

二 要約ノート(パラグラフ・ノート)を作る

章名が決まったら、次に、段落ごとに内容をまとめ、一つの段落ごとに一行から二行程度に要約文を作ります。これが一番大切な作業になります。このノートがしっかりとできると、次の作業が楽になります。

章名と要約ノートの違い

章名——その章のイメージをザクッと表現する。その章の内容全部を網羅していなくてもよい。

要約ノート——次のステップで区分を整理するときには内容が見えてこないノートでは意味がなく、

パラグラフごとに内容がきちんと要約されている必要がある。

三 区分を整理する

要約ノートをながめながら、内容を区分に区切っていきます。大区分・中区分・小区分の三階層くらいに分けます。あまり細か過ぎず、ザクツとし過ぎず、全体がながめられる程度に区分けをします。二階層くらいでも十分な場合が多いと思います。

区分けをしたら、それぞれにタイトルを付けていきます。パソコンを使うと、とても便利です。リターン・キーを使いながら、一行あけて、そこにタイトルを差し込むようにします。

アウトラインは以下のような記号を使います。

- I …… (大区分)
- A …… (中区分)
- 1 …… (小区分)

これで自然とアウトラインの出来上がりです。世界中どこを探してもない、自分だけのオリジナルです。

四 チャートにする

前の段階で作ったアウトラインをチャートにします。第六章にいくつか例を載せておきました。参

考にしてください。

五 関係探しをする

チャートを見ながら、「関係」や「動き」がないかを探ります。「関係」とは以下のようなことを意味します。

繰り返し——繰り返されていることばやフレーズを探します。

比較——「A→B」（反対、対称）や「A←A」（似ていること）という関係がないかを探します。

原因と結果——「原因↓結果」、「結果↑原因」という関係がないかを探します。

問いと答え——「質問↓答え」、「問題提起↓解決」という関係がないかを探します。

総論と各論——「総論↓各論」、「各論↑総論」という動きがないかを探します。

要約——その前の内容、その後の内容を要約している部分がないかを探します。

クライマックス——最も盛り上がっている部分、流れの方向が変わる「転換点」がないかを探します。

これらの関係を見つけたらチャートに書き込んでおきます。

六 重要ポイントを見つける

「関係」を探したら、その中で、「クライマックス」、「転換点」、「要約」の三つに特に着目して、全

体をもう一度見てみます。これらの三つはこの書の中でかなり重要な部分になります。書いた人が戦略と考えている部分でもあります。

重要ポイントを見つけたら、チャートに書き込んでおきます。

これが基本的なフォーマットです。より詳細に学びたい方は、以下の参考文献を参照してください。

〈参考文献〉

『開け！みことばへの耳もつと教師が生かされるために』（イムマヌエル総合伝道団・教会学校部、

エバタシリーズ2、二〇〇三年）

Robert Traina, *Methodical Bible Study*, Zondervan, 2002



河村従彦 (かわむら・よりひこ)

札幌で生まれ、東京で育つ。慶應義塾大学文学部卒業、フランス文学専攻。イマヌエル聖宣神学院卒業、牧師として配属される。アズベリー・セオロジカル・セミナリー修了、神学、宣教学専攻。牧会しながら、ルーテル学院大学大学院総合人間学研究科臨床心理学専攻修士課程修了。東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科人間科学専攻博士後期課程単位取得後退学。現在はイマヌエル聖宣神学院院长、牧師・臨床心理士。著書「神さまイメージ豊かさ再発見」、訳書「子供服を着たクリスチャン」、「恵みを知らないクリスチャン」、他。家族は妻、二児の父。

聖書 新改訳 © 1970, 1978, 2003 新日本聖書刊行会

“聖書読み”のコツ

2015年7月20日 発行

著者 河村従彦

印刷製本 シナノ印刷株式会社

発行 いのちのことば社

〒164-0001 東京都中野区中野2-1-5

電話 03-5341-6922 (編集)

03-5341-6920 (営業)

FAX 03-5341-6921

e-mail: support@wlpn.or.jp

http://www.wlpn.or.jp/

© Yorihiro Kawamura 2015

Printed in Japan

乱丁落丁はお取り替えます

ISBN 978-4-264-03433-9



9784264034339

ISBN978-4-264-03433-9

C0016 ¥1400E

18240



1920016014008



いのちのことば社

定価（本体 1,400 円+税）



022752

01
4